埼玉大学紀要　教育学部，68(2)：155－182（2019）

地域社会の過疎化と青年の果たす役割（Ⅱ）

―西米良村・八雲町・鶴ヶ島市の事例を織り込んだ総合的考察―

坂　西　友　秀　　埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード：過疎、青年団、地域文化、少子高齢化、市町村合併、地域おこし

1　地域社会の存続と活力源としての青年・青年団（会）

1．過疎地域

本研究では、いくつかの地域を事例として取り上げた。都市近郊の市町（鶴ヶ島市・粕屋町）もあれば島（南風原町）、山間地の村（泰阜村）もある。地域の伝統・文化の継承は、過疎の自治体に限られるわけではないことは、少子高齢化が広く深く進行し、次代を担う子どもや若者がどこでも少なくなっていることを示すものである。とりわけ、少子高齢化は、過疎の自治体にとって大きな影響を及ぼしている。

過疎地域は、平成12年４月１日から10年間の時限立法「過疎地域自立促進特別措置法」で規定されている。「過疎地域自立促進特別措置法は、人口の著しい減少に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他地域と比較して低位にある地域を過疎地域ととらえ、住民の福祉の向上、雇用の増大、地域格差の是正という従来からの目的に加え、過疎地域に対し、豊かな自然環境に恵まれた21世紀にふさわしい生活空間としての役割を果たすとともに、地域産業と地域文化の振興等による個性豊かで自立的な地域社会を構築することにより、我が国が全体として多様で変化に富んだ、美しく風格ある国土となっていくことに寄与することを期待しています」（総務省自治行政局　過疎対策室，2009）。人口が激しく減少し、活気がなくなっている地域を過疎地域と定義している。「過疎地域の要件」は、以下の２つ（法第２条の（1）と（2））である（平成22年、26年にさらに条件が２項が追加されている。人口関連のみ掲載）

（法第２条）中長期的な人口減少及び、長期的な人口減少の結果としての年齢構成の偏りから過疎地域を捉えることとし、過疎地域の要件を（1）かつ（2）に該当する地域とした。

（1）人口要件：以下のいずれかに該当すること

１）昭和35年～平成７年の人口減少率が30％以上

２）昭和35年～平成７年の人口減少率が25％以上、高齢者比率（65歳以上）24％以上

３）昭和35年～平成７年の人口減少率が25％以上、若年者比率（15歳以上30歳未満）15％以下

４）昭和45年～平成７年の人口減少率が19％以上

＊ただし、１）２）３）の場合、昭和45年～平成７年の25年間で10％以上人口増加している団体は除く。

（2）地方交付税法（昭和25年法律第211号）第14条の規定により算定した市町村の基準財政収入額を同法第11条の規定により算定した当該市町村の基準財政需要額で除して得た数値で平成８年度から平成10年度までの各年度に係るものを合算したものの３分の１の数値が0.42以下であること。

なお、合併の場合の取扱いは法令33条で別に規定されている。

(法第33条)

1）市町村の廃置分合により設置された、又は境界変更があった市町村が、総務省令・農林水産省令・国土交通省令に定める要件に該当する場合は過疎地域とみなす（第１項)。

2）過疎地域市町村を含む合併があった場合、過疎対策事業が引き続き円滑に実施できるよう、合併による新市町村が法第２条及び１）の要件に該当しない場合であっても、新市町村の区域のうち、旧過疎地域市町村の区域を過疎地域とみなす
(第２項)。

(2) 次のいずれかに該当し（人口要件)、かつ、平成18年度～平成20年度の３ヶ年平均の財政力指数が0.56以下で、公営競技収益が20億円以下（施行令第１条）であること
(財政力要件)。

①S35年～ H17年の人口減少率が33％以上

②S35年～ H17年の人口減少率が28％以上、高齢者比率（65歳以上）29％以上

③S35年～ H17年の人口減少率が28％以上、若年者比率（15歳以上30歳未満）14％以下

④S55年～ H17年の人口減少率が17％以上

＊ただし、①②③の場合、S55年～ H17年の25年間で10％以上人口増加している団体は除く。

(3) 次のいずれかに該当し（人口要件)、かつ、平成22年度～平成24年度の３ヶ年平均の財政力指数が0.49以下で、公営競技収益が40億円以下（施行令第１条）であること（財政力要件)。

①S40年～ H22年の人口減少率が33％以上

②S40年～ H22年の人口減少率が28％以上、高齢者比率（65歳以上）32％以上

③S40年～ H22年の人口減少率が28％以上、若年者比率（15歳以上30歳未満）12％以下

④S60年～ H22年の人口減少率が19％以上

＊ただし、①②③の場合、S60年～ H22年の25年間で10％以上人口増加している団体は除く。

(4) 次のいずれかに該当し（人口要件)、かつ、平成25年度～平成27年度の３ヶ年平均の財政力指数が0.5以下で、公営競技収益が40億円以下（施行令第１条）であること
(財政力要件)。

①S45年～ H27年の人口減少率が32％以上

②S45年～ H27年の人口減少率が27％以上、高齢者比率（65歳以上）36％以上

③S45年～ H27年の人口減少率が27％以上、若年者比率（15歳以上30歳未満）11％以下

④H2年～ H27年の人口減少率が21％以上

＊ただし、①②③の場合、H2年～ H27年の25年間で10％以上人口増加している団体は除く。

平成17年度の総務省自治行政過疎対策室の調べでは、過疎地域の人口は全体の７％で、地域の面積は国土の半分を占める。全市町村数は2,396でそのうち899は過疎地域であり、全体の37.5％を占める。人口比が少ない割に、過疎地域に該当する市町村数が４割弱になっており、人々がいかに都市部に密集しているかがわかる。なお、平成26年度には、過疎地域は、全市町村1,719のうち797（46%）市町村、面積は国土全体の59%であり、大きく拡大していることがわかる。10年弱で自治体数は約72％にまで減少し、合併の進行が顕著だ。

最初に、矛盾が集中する過疎地域を例に、地域の存続に占める若者の位置がきわめて大きく、絶対的な意味を持つことを考察し、明らかにしたい。過疎地域として積極的な地域振興と若者の招致活動を展開している宮崎県西米良村（図１）の聞き取り調査を基に考察を進める。聞き取り

調査の場所は、宮崎県西米良村の町役場及び後述する「作小屋」であった。調査対象者は村長、役場職員、青年会員、棚田守・作小屋体験塾を主宰する村民であった。調査の日時は、2009年３月27日、28日であった。聞き取り方法は従前と同様である。村の総人口（2009年10月現在）は、1,297人、高齢化率は41.62％、少子率は10.86％である。法定の過疎地域である。高齢化率の高さがきわだっている。ほぼ2.5人に１人は65歳以上の高齢者である。南風原町、粕屋町、鶴ヶ島町の高齢化率が12％～13％であるのと比較すると、いかに山間地域の高齢化が進んでいるかがわかる。西米良村は、上記法第２条１に該当する過疎地域に指定されている。なお、2017年５月現在の村の人口は1,201人であり、10年弱で90人強の人口減少である。

図１　宮崎県西米良村（西米良村観光協会, 2009より）

西米良村の概要を、村の紹介で見てみよう（西米良村, 2009）。西米良村は古来、日向の国に属し、1501（文亀元）年、隈府城主菊池氏が入山、その後400年もの間、菊池氏によって統治されてき、「貧しさに耐えながらも文武を怠らず、礼節を重んじ、国家社会に尽くす」としたその教えは、現在も菊池精神として村民の心に受け継がれているという。

1889（明治22）年５月１日の町村制施行によって西米良村が誕生した。現在、「菊池氏の薫陶・生涯現役元気村『カリコボーズの休暇村・米良の庄』」の整備を進めている。これは交流人口促進による村の活性化を図るとともに、快適な定住地の形成に努めながら魅力ある自然や風土、歴史、文化など地域固有の資源にテーマ性を持たせた地域づくりを推進するためである。特に1997（平成９）年度、全国に先駆けて取り組み始めた「西米良型ワーキングホリデー制度」は、交流人口拡大や村の活性化に大きな効果を上げているとのことだ。遠くは北海道や沖縄など県内外から毎年約50人が参加しており、リピーターも定着している。また、市房山を源とする一ツ瀬川は、ヤマメ・アユ釣りのメッカとして有名で、特に夏はキャンプ地として愛好されている。

近年、特産のホオズキを生かしたイベントの実践や語り部、花き栽培、山村留学など地域特性を応用した村づくりも注目を集めており、2003（平成15）年度には東洋一の木造車道橋「かりこぼうず大橋」が完成。年間14万人以上の人々が訪れている。

村はこれまで、2000（平成12）年度に過疎地域自立活性化優良事例国土庁官賞、2002（平成14）年度優良観光地づくり賞、2004（平成16）年度に地域づくり総務大臣賞表彰を受賞。さらに2003（平成15）年度は黒木定藏村長が観光カリスマ百選にも選ばれ、2006（平成16）年度は、オーライ！ニッポン大賞を受賞している。過疎の村の自然を生かした振興策が功を奏している。

２．村の存続を脅かす少子高齢化

地域には私たちの暮らしを支える基盤としての自然環境が保全されてきた。その自然環境も荒廃が進み、地域の衰弱は、限界にきている。「村民は（貧しい）この境遇を毎日なげき『この村にいては将来がない』と、我が子を競って大都市に送り出してきた。その結果、里山が荒れ、耕作放棄地が増えていった。19世紀の村と揶揄される所以だ」（辻, 2009）。全国各地の過疎地域をみ

ると、住民の生活が成り立たなくなり、自然環境と共に全体としてまとまりをもっていた社会がぼろぼろ崩落してきていることがわかる。社会が消えつつあるところでは、地域固有の文化もなくなる。今日本の社会全体が崩れつつあるほどの危機に瀕しているといっても過言ではない。

少子高齢化と過疎化に歯止めをかけるために、村独自の施策を実施しているのが宮崎県の西米良村である（前田, 2004, 西米良村, 2001）。最盛期の村の人口は約8,000人であったが、今は約13,00人にまで減少した。西米良村は、宮崎市内から２時間くらい車で入った山深いところにある。自然資源の保全と社会的な基盤の整備が昔に比べて著しく弱くなっていると住民はいう。その中で村民がどう生き残るか、ぎりぎりのところで苦闘せざるを得なくなっている（前田, 2004）。西米良村で「背水の陣」を敷く住民の思いを知り、病んでいる日本社会の姿を垣間見ることができた。

少し前まで東米良地区があったが、古墳群のある西都市と合併した。東米良地区の現状は、各地で展開される広域合併の特徴を象徴している。経済性と合理化を突き進めると、弱い地域・社会はすべてなくなってしまう。東米良地区も山の奥とはいえ以前は栄えていた。一ツ瀬ダムができ（九州電力, 2009）、川筋の村の一番よい土地、谷間の平地は全部水底に沈んだ。ダムの建設（1963年運転開始）は、集落の住みやすい環境を奪ってしまう。当時、約2.500人が住居を移転した。予算を節約するために合併するのであるから、行政は「無駄」なところにお金は費やしない。子どもの少ない過疎地では学校の統廃合が進められ、地元の学校がなくなってしまう。

学校は学制が敷かれた明治以来地域を統合する象徴であり、住民をまとめる中心であった。ところが広域合併により生活圏が拡大すると、不便な村から便利な町へと村民が移動してしまう。離村が促進され、集落に住民がいなくなってしまうのだ。今、東米良地区の小学校には２人しか子どもがいない。西米良村にも学校がいくつかあったが、今では小学校２校、中学校１校しかない。地域の将来を担う子どもが極端に少なくなってしまった（西米良村, 2001）。

３．共助の村の仕事興しと青年会　西米良村には昔菊池という領主が住んでいた（菊池記念館, 2009）。その領主が、村を出るとき、領地である土地をそのままにしたのでは、村民が窮すると考え、分け与えた。村の中心部に近い人には土地の面積を小さくして、離れた人には大きくして公平に分配した。領地の分配と関わって、西米良村に独特の文化は、若い人が結婚しても親と同居をする習慣がないことである。嫁姑の難しい関係もあまりないと黒木定蔵村長（60歳）は語る。それは、昔領主から土地を分け与えられたそのとき以来村民は自作農になったこと、山深い村であったため相互扶助の精神が大切にされてきたことと深く関係している。

若い人たちが結婚すると、親は自宅から離れた山に家を建てる。山中の家に別居した親は、今度は村の中心部から離れた山を管理する。この家を「作小屋」という。小屋とはいってもりっぱな家が建っている。百年以上経ているものもある。家族同士、村民同士がお互いに協力し合う文化が作小屋を生み出してきたのだという。

山が深いだけに一次産業が衰退している村内には十分な働き口がない。村は過疎化と少子化の波にもまれ、「生き残り」が大きな課題になっている。林業だけではとても生計は立てられない。山は林業組合が管理しているが、村全体を見れば荒れた自然がそこここに目につく。2,000年の農林センサスでは、農家数は171戸で、農業人口は546人である。総農家数は937戸で、農業後継者のいる農家世帯は47戸で全体の28.7％しか後継者がいない（西米良村, 2001）。

2017年度現６月時点で新規就農者を１名募集しているが、独立するまで数年かかるとし、村の臨時職員として採用している。「ゆずの里」で知られる高知県馬路村、山深く環境は西米良村と似ている。「馬路村は、四国は高知の山の中。人口は、1,000人足らずの過疎の村です。遊びは、山

と川しかありません。山の暮らしはたいへんですが、ゆずに木工に温泉にとがんばっています」。村の紹介だ（馬路村, 20017）。二地区（馬路729人･魚梁瀬174人）の合わせた人口は903人（2017年１月31日）である。「ゆず」を特産にした観光と産業で村は活気がある。しかし、村の人に話を聞くと（2016年）、働き手となる若者が地元だけでは足りず、近隣の地域からから通勤してくるという。村は「木工」の地域おこし協力隊員を、別途「魚梁瀬」でも隊員を１人募集している。また、東京在住の人に「特別村民制度という特別なファンの住民を募集」して村の活性化につなげている。西米良村と馬路村には地元が持つ資源に違いはあっても、地域の活力を大きく引き出す鍵は若者が握っていることがわかる。

西米良村では、青年会が村を支え、村民との協力・連携もとれている。Ｕターンした中武さんは青年会活動を通して新たな村の魅力を作り出している。村外で働いていたが、橋梁技術者として帰村し家業を継いでいる。彼女の言葉を借りよう（中武, 2016）。「西米良に戻ってきた私は、ふるさと孝行をすべく青年会に入りました。現在、村の人口は、1,200人、20代を中心とする青年会は22名で構成されています。青年会の活動は、イベントの物品販売など、毎年同じことを繰り返すばかりでした。私は、村が盛り上がり、そして青年会が楽しく勇気をもってくれるような企画はないかと考えるようになりました。そして、ついにその答えが天から舞い降りてきたんです。それは、昨年の事です。宮崎『橋の日』活動をされている方から、西米良でもやれるのではないか、と投げかけられました。これだ。やろう。私にもできる。そして私は今年青年会長になって、皆に話しかけてみました。場所は、かりこぼうず大橋です。この橋は、平成14年度に完成しました。樹齢50年の県産スギを集成材にして地元の名峰である米良三山をイメージしたトラス橋です」。

「青年会で了解を取り付け、協力者を集め必要な物品を手配し、参加者のボランティア保険を手配する等々。時間は経つ。答えは出ない。希望と不安と焦りの中」、初めての西米良「橋の日」の取り組みは大変だったという。「「橋の日」活動に賛同して絶対成功させようと奔走した青年会」、このことばには彼女の思いを実現させる青年会仲間の強い結びつきが現れている。「開始は朝６時半。青年会も眠い目をこすりながら出てきてくれました。…青年会も子どもも大人も生き生きとして、協力しながら「橋の日」活動を行っている。これがまさに私が目指してきた、笑顔あふれる地域づくりでした」。青年会は、「新春やまびこロードレース大会」（西米良村青年会, 2017）も主催している（開催日2018年１月15日）。幼児の50ｍ走、小学１・２年生1000ｍ、３・４年生1500ｍ、５・６年生2000ｍ、中学生・一般男女5000ｍ・3000ｍときめ細かく用意されている。地域の若者は、縁の下の力持ちであり、老若男女村人の交流を生み出し結びつける潤滑油であり、村を将来に向けて力強く引く牽引役であり、村の要になっていることがわかる。

①西米良ワーキングホリデー　黒木村長をはじめ西米良の人たちは、今「合併は絶対しない」、「合併したら村はなくなる」と考えている。東米良集落の二の舞を演じたくないという。事例３で触れた過疎の村泰阜村も同様だ。「合併しても村の福祉の低下を招く状況では、合併ではなく自立を選択せざるを得ない」との村人の思いを辻（2009）は述べている。

老若男女が智恵を出し合って、村の総力を挙げて活性化と若返りを図る。村の現状を見ると自然的基盤も社会的な基盤も大きく失われてきている。人手がないので自然が荒れてしまうのだ。鹿猪が増え、作物の被害が広がったと作小屋体験塾の黒木敬介さん（61歳）はいう。山から畑に鹿が降りて来て作物を荒らすため、家の周りの林には網が張りめぐらされている。村には今高齢の猟師が２人しかいない。村を維持し継承する若い人が少ないからだ。西米良村の小川集落には62戸（かつては100戸）の家があるが、子どもは小学一年生から六年生までで二人しかいない。

学校へはスクールバスで送り迎えする。通学路は谷また谷で、小学校まではダムサイドを車で走って２、30分かかる。村には、小学校が２校（村所小学校・越野尾小学校）と中学校が１校ある。2001年の児童・生徒数は、小学生が62名、中学生が31名である。村に高校はなく、下宿をして近隣の高校に通う。

夏には観光客が沢山訪れ、村の人口は一時的に急増する。一ツ瀬ダムの上流に位置する村は、清流に恵まれ、渓流釣りの愛好家が多く訪れる。1988年～1999年に実施された「ふるさと創生」事業で掘削した温泉「ゆたーと」は、泉質がよく村人の交流の場であると共に、重要な観光資源にもなっている。山と川の自然を活かした子どもキャンプなど、野外活動を中心にした事業は村に活気をもたらしている。

今は村の担い手になる青年を呼び戻すことに力を入れている。取り組みの一つに、「援農」がある。西米良版のワーキングホリデーの制度である（西米良村, 2009）。日本人がオーストラリアなどへ行ってアルバイトをしながら現地の生活に親しむ、これがワーキングホリデーのイメージであろうか。西米良村のワーキングホリデーは、村外の若い人に農家を手伝ってもらい、村のいいところを見てもらおう、というものだ。規定の賃金はきちんと払う。「ホリデーが終わって帰る時には村でお土産を買って、地元にお金を落としていってもらいたい」と、黒木村長は村内での経済の循環を期待している。最近、援農に来ていた京都の女性が、農家の男性と結婚したとの嬉しい話もあった。都市と農村の交流を活かした「西米良版グリーンツーリズム」構想といってもよいかもしれない。「農村地域では、地域の荒廃化、解体につながるような事態が進行しているといってよく、地域活性化へのインパクトがこれまでになく強まっている」。農村の逼迫した状況を井上ら（井上・中村・山崎, 1996）が指摘したのがいまから10年前である。「そうした中で多くの農村地域は、都市住民の間に広がっている新鮮、安全、安心な農産物や緑豊かな自然と伝統文化に囲まれた余暇空間への新たなニーズに依拠した都市農村交流に地域再生の期待をかけ、地域農業の再構築、地域活性化に取り組んでいる」。秘境ともいえる山村の溢れる自然が、僻地であることを象徴し、都市部への人口の流出が過疎化につながった。今またその自然の恵みを活用して、そして歴史と文化を活かした起業によって村の再生が図られるている。人間も自然の一部であることを考えれば、自然環境なくしては都市も農村も人間らしい潤いと活気のある生活を生み出すことはできない。都市と農村が互いのよさに気づき、連携できる道を探っているのが西米良村である。

新規の移住者の増加は、地域の活力を生み出すためには欠かせない。村の総務文教常任委員会の報告では、平成26年度には26名、平成27年度には42名が移住し、40歳以下の人が多くなっている。総務省の地域おこし協力隊の受け入れも行っている（西米良村議会, 2017）。また、村では、新規就農者を募集し、定住者の拡大を図っている。「西米良村ゆず団地へ…新たに農家（約１ha、600～700本程度）として入植される方を１名募集します。平成29年６月30日（金）まで」。条件を見ると「50歳未満、日給8,550円」で、入植１～２年後には独立就農することとなっている。ただし、「現在は十分な収入が見込めないことから、村臨時職員としての雇用」だ（西米良村役場農林振興課, 2017）。移住者は二桁あるにもかかわらず既述のように10年弱で人口は90人程度減少している。

②村を支える青年・青年団（会） 西米良村には青年団があり、団員たちはみんなで知恵を出し合い魅力的な村作りに力を発揮している。黒木義光さん（33歳男性）と冨高麻美さん（28歳女性）に団の活動をうかがった。二人とも西米良村の出身ではない。牧さんは、大学までは宮崎市で過ごし、10年ほど前に臨時教員として西米良村に赴任した。冨高さんは、一時西都市で県の臨時職

員をしていたが､退職して臨時教員の道に入った。産休代理で臨時教員として西米良村に着任した。しだいに村になじみ、役場職員の道を選択した。今は村営住宅に住みながら、村興しに力をれている。2008年現在、村の青年団は31名の団員で構成されている。半数は役場職員で、その他はゆず・ほおずき作りを主体にする専業農家、温泉施設、森林組合、JA、養護施設、建設業、保健所、等多様な職に就く若者である。役員は月に1回､定例会を開き､企画から運営まで気を配っている。青年団は、村のいろいろな行事を支え盛り上げ、活気のある村作りに大きな力を発揮している。村の誇る温泉「ゆた～と」では、若者が夕風呂会を作り、風呂場の掃除を引き受けている。無料奉仕であり、一日の仕事が終わった後の毎日の清掃は若者の「村を盛り上げるぞ」という意気込みがなければできない。

村の「菜の花祭り」や「カリコボーズの温泉祭り」では青年団は大いに活躍する。幼稚園児・小学生・中学生・村民が一堂に会して楽しむ「メラリンピック」・スポーツ大会や交流会にも青年会は参加し、盛り上げに一役かっている。2008年度には、日本青年団協議会の全国青年団教宣コンクールのキャンペーン部門で優秀賞を獲得している。オリジナルTシャツをつくって賞に輝いた。青年会のボランティア部が中心になって、書き損じのはがきを回収し、奨学資金にする支援活動にも参加していた。青年会は子どもと大人を橋渡しし、村を活気づかせる中心的役割を担っているのである。2016年には20人以上の若者が青年会活動を行っている。中武さん（2016年）の報告にあったように、若者は村の生活に根ざした地域づくりをしていることがわかる。

「村に若者がすくなくなると、若い人たちは、その集まりにうらさびしさをおぼえるようになり、（青年団への）出席もまたにぶってきた。こうした青年の動きの中に、農村の将来が予見されるのである。青年は定着性が乏しく、しかも時代の動きに対してもっとも敏感だからであり、村にのこる青年の苦悩が、同時に村の苦悩であるともいえる」（宮本, 1963)。地域を支える力が若者に大きく依存することは、今も昔も変わらない。

③歴史・文化を活かした村づくり　村は今、村民の総力を挙げて魅力あるふる里作りを実践している。村の中で何とか若い人が働く場を作ろうと、村の歴史・文化である「作小屋」を生かした外来者向けの研修施設､「語り部の里」も造られている。甲斐あって、2009年の夏には若い人も含めて11人ほどが村に戻って来る。子どもがいて、若者が元気に活動できる職場を村内に開拓できれば、地域の未来と展望が開けてくる。際限のない人口の都市集中は、産業の地域的偏りを反映したものでもあり、一次産業・自然を生かした地場産業の振興へと構造的転換を図ることが過疎地域を復活させる一つの道である。泰阜村のNPO法人グリーンウッドの事業は先駆的な事例である。しかし､「都市を離れて自然の豊かな地域で学び、暮らす」山村留学は、今曲がり角に来ている（朝日新聞, 2009年９月13日)。参加者側に不況による経済的な負担が増していることと、受け入れ側の財政難と高齢化とが山村留学者の減少に拍車をかけている。「中山間地で生き抜いていくためには、地域の農業を守る方向を明らかにすることが課題である。これらの課題に向き合いながら、小さな単位から活動をつくり、声をあげていくことが、自立する村をつくるために求められる」（桐生, 2009)。農村地域や中山間地の自然を活用した活性化も指摘されてきた。その一つが前述の「日本型グリーンツーリズム」であった（川崎村, 1999)。「グリーンツーリズムは従来の名所めぐり、有名リゾートへの観光旅行とは範疇的に異なるのであり、緑豊かな自然、美しい景観の中での休養、自然観察、地域の伝統・個性的文化との出会い、農村生活体験、農村の人々とのふれあいを求めての旅である」（井上・中村・山崎, 1996)。一次産業の再生を含めた地域の振興が、村の活性化につながり、若者を過疎地域に呼び戻すためには必要だということだ。

観光の振興で過疎をくい止め、活力を取り戻そうと奮起するのが石垣島だ。美しい海岸、珊瑚礁、熱帯性の植物や種類豊富な南国の果物、色とりどりで多様な魚介類、川遊び・ダイビング・シュノーケリング等のマリンスポーツ、いずれをとっても自然の恵みの賜である。海だけではない沖縄県で最高峰の於茂登岳、島全体を展望できる景観地・野底岳もある。島独自の蝶やトカゲ、独特の野草・草花がある。これらの天然資源を産業や観光に生かすことができるのは若者がいるからだ。

そして、伝統文化の宝庫ともいわれる沖縄県・八重山地方では、若者が文化の継承・発展に大きな力を発揮していることは事例５の石垣島を例に見た。年間の最も大きな行事の一つ「豊年祭」でも、青年会は御嶽への奉納の旗頭を務め大役を担っている。幼児から古老・年配世代までまさに御嶽ごとに集落総出で伝統行事とお祭りが催されている。新空港が開港し、島全体が観光で活気づいているが、周辺部の過疎化は進んでいる。老若男女がバランスよく生活しているからこそ地域が維持され、伝統的な儀式やお祭り、芸能、さらには新たな時代に即した文化が生み出されることがよくわかる（館浦, 2017）。

島には一年を通していろいろな行事がある。旧盆の「ソーロン」(旧暦７月13日～15日) は、家々で行われる御先祖供養である。年によって時期が移動し、４年周期で一巡するという。2017年は、９月３日から５日の供養である。供養の期間には、盆踊り、獅子舞や「アンガマ」が、公民館の広場と舞台で披露される。アンガマとは、「あの世からの使者であるウシュマイ (お爺) とウミー (お婆) が花子（ファーマー）と呼ばれる子孫を連れて現世に現れ、家々を訪問。珍問答や踊りなどで祖先の霊を供養する独特の行事。三線を弾き、太鼓を打ち鳴らし、笛を吹き、念仏を唱えながら、唄い、踊る」（たぶちほのか, 2001）伝統的な「ミュージカル」ともいえるものだ。白保地区では、盆踊りのあと、公民館の野外芝生広場に住民が集まり、アンガマの舞台を見て楽しむ。若き青年女性のユーモアのあるしなやかな踊りは見ている人を惹きつけ和ませる。

アンガマに続く「白保の獅子舞」は、歴史的伝統芸能だ。獅子は生き生きと舞い、躍動感にあふれ広場は盛り上がる。まん丸の目をした愛嬌のある獅子たちは、時には大きな口を開けて子どもたちを飲み込もうとする。小さな赤ちゃんは口から飲み込まれお腹から取り出される。無病息災を祈願してのことだ。獅子の先導・獅子舞・獅子の誘導、太鼓や三線の演奏、すべて獅子舞保存会・青年会の力と住民の協力があってのことである。

その一方で、伝統・文化継承の悩みと課題は、過疎地域だけに共通したものではない。少子高齢化が急速に進行している都市部の地域にもあてはまる。南風原町、粕屋町、鶴ヶ島市の事例は、市街地化する地域の後継者育成における子どもと若者の占める位置の重要性を示すものである。人口が集中する都市部といえども、次代を担う子どもや青年を育てなければ地域の伝統文化や行事を継承し維持することは難しい。地域全体を自治的に運営するためには、年配世代から若者世代への生活・文化の伝承がなければならない。しかし、若者世代への伝承・継承が今危機的な状況に陥っている。町内会や自治会の課題には、「役職層が高齢化しており、若年層のリーダーが育たない」(76.0%)、「新住民の既存自治会・町内会等への加入等が困難となりがち」(60.7%) が上位にあげられている。(内閣府, 2004)。育てるべき若者が少ないことにより、地域社会を維持することが困難になっている状況は、過疎地に限らない一般的な深刻な問題なのである（内閣府, 2004)。

2　若者の自治的活動の再生と地域の活力

1.「市場原理・市場経済」を超えて

地域の文化と共同体を維持することは、「お金」になる活動ではない。金銭的に考えたら、「無駄」な作業や活動が実に多い。青年会の活動は無償で、非営利的な自主的活動である。青年たちは、年一回日本青年館で開催される全国青年問題研究集会に年休をとって参加する。年々、年休をとりにくくなっていると多くの青年はいう。長期的に広い視野で見ると、青年の集会への参加は地域の自治を担う若者を育て、リーダーを養成することにつながり、社会にとって有益なことである。若者に限らず、日々の生活を充実したものにするために、生活と仕事のバランス（ワーク･ライフ･バランス）が重要であることが認められつつある今日（ジル・A・フレイザー, 2003, 全国労働基準関係団体連合会, 2008, パク・ジョアン・クチャ, 2007)、地域の自治を担う青年の自発的な活動がもつ今日的な意義を改めて見直さなければならない。

地方・地域に受け継がれる伝統行事・祭りは、「需要と供給」の市場原理の枠にはまらない典型的な例である。祭りを盛り上げて観光を盛んにし、観光収入の増加で地域活性化を図る。各地で大規模なお祭りイベントが開催されている。石垣島の豊年祭は、観光でも有名である。しかし、豊年祭は住民の生活に根ざした実りへの感謝であり、豊穣祈願の祈りである。地区を挙げて準備をし、老いも若きも総出で行事を執り行い、御嶽に奉納する。盆踊り・アンガマ・獅子舞、いずれにしても、集落挙げての行事で、集落の人々の自発的、自治的な活動である。青年たちが、石垣市の市民会館を会場に行う文化祭には、沖縄本島や与那国の青年会も参加し、琉球舞踊、歌謡、創作劇を披露する。彼らは、決して強制されてやっているわけではない。仕事が終わった夜間や休みの日に練習し、創作するのだ。「需要と供給」、「労働とその対価（交換価値）としての賃金」といった利潤を追求する経済の枠外にあるのである。経済関係を越えた人間関係と地域社会の営みがあるからこそ、若者のひたむきで純粋なエネルギーが発揮され、地域に活力がみなぎるのである。地方・地域を「市場経済」「需要と供給」の関わりで覆い尽くすとき、人間関係は閉塞し、地域は窒息してしまう。

若者の積極的・創造的な地域活動は、企業・会社から見ると、労働力の浪費になるのである。多くの青年は十分な経済的基盤がないため、職場との軋轢は避けたいところである。会社の反対を押して青年団活動をすることは、仕事をたちゆかなくしかねない。地域を維持する青年の自治的な活動は、経済効率を至上のものにする社会では企業・会社の利益と根本的に矛盾したものになってしまう。取り上げた事例から明らかなように、地域の文化的な活動に参加することは、報酬を見返りに期待するものではない。減少傾向にあるとはいえ、青年団・青年会が各地に存続していることは、彼らの無償の自治的な活動が地域社会の維持に大きく貢献していることの証左といえる。本論文で取り上げた事例はいずれも、地域社会の生活と文化の維持と継承は、単に交換価値としての経済性を越えた協同的で人間的な営みであり、世代間の密度の濃い連携の賜であることを示している。

補足として一見趣の異なる中国延辺朝鮮族自治州延吉市の「出稼ぎ」を取り上げた。国が違い、政治体制から社会制度、法体系、言語、民族とあらゆる面で異なるが、若者が大都市や海外に流出し、「人口」が急激に減少している点で日本の地方・地域の少子高齢化、過疎化と共通する部分があると考えた。延吉市では、学童期の子を残して、両親が出稼ぎに出る場合、「留守児童」と呼

んでいる。「出稼ぎ」の概念が、日本で言われてきた短期の季節労働などとは質的に異なる。事例研究では、10年近くに及ぶ海外・韓国での就労と「留守児童」の生活と成長の過程を、当人の体験に即して本人の視点から明らかにした。

既に触れたように、「出稼ぎ」による子どもへの影響の大きさもさることながら、日本の各地で進行している過疎化に対して示唆する点があることも重要だ。

一つには、人口の減少が続くと、行政的な機関や施設の統廃合が進み、周辺地域は一層不便になってしまう。人口の少ない北欧のフィンランドでも、財政支出の削減のため地域の行政的な統廃合が進んでいると聞いた（坂西, 2016）。北海道八雲町は、2005年隣接する熊石町と合併した。「人口は平成20年12月末日現在の住民基本台帳で19,473人、世帯数は8,684世帯である。毎年徐々に減少が続き、核家族化、高齢化も進んでいるが、町の施策として積極的な移住促進に努めている」（八雲町, 2017）。平成29年６月現在では17,121人で10年弱の間に2,000人以上減少している。他方、西米良村の隣り東米良村は、一ツ瀬ダムの建設に際し1962年に西都市・木城町に編入した。高齢化率は58%（市は32%）を超えていて５人に３人は高齢者だ（西都市, 2016）。10年、20年先を案じ、「東米良地域づくり協議会」を組織している。過疎地域における産業の振興は、安定した雇用及び所得の確保を図り、若者などの人口の流出の抑制とUターン、Jターン、Iターンを促進する上で最重要課題として位置づけている。国は違えど延吉市同様、人口の極端な流出と減少は行政の縮小を招き（毎日新聞, 2017）、自治体や集落の存立を脅かすことになろう。

二つ目は、延吉市の例が示すように、若者人口の減少は、行政の縮小に伴い、学校の統廃合と子育てに必要な教育環境の悪化に拍車かけてしまう。そのため、質の高い教育とより多くの選択肢とを求めて、都市部へと多くの住民が移動する。延吉市の「出稼ぎ」と人口の減少に連動した学校等の教育諸機関の激減は衝撃的である。教育は次世代を育て、地域の基盤を作る最も基本的なものであり、日本の過疎化は延吉市と本質的には同じ教育問題を内在しているといえよう。

第三に、では有効な解決策があるのだろうか。延吉市の朝鮮族の人々は、豊かな収入とよりよい教育を得るために、大都市や韓国に「出稼ぎ」労働者として流出する。農村部の18歳から39歳までの多くの女性が出稼ぎに行くといわれ、地方に残る若者の結婚も難しくなる（DailyNK Japan, 2016）。日本の地方の過疎化が進行する背景と共通しているのではないだろうか。経済的な格差を縮小させ、質の高い教育・文化をどこにいてもだれもが享受できるようにすることができれば解決の糸口が見いだせるであろう。しかし、それは容易ではない。

都会にはない地域の魅力を発掘・発信する、地域の資源を生かした起業をする、観光資源を活用して集客力を高めて若者の定着を図る、各地であの手この手の工夫を凝らしている。会社・企業が集中し、各種のインフラが整備され、商業施設・娯楽施設が集まる都市に若者が魅力を感じるのは自然の成り行きであろう。しかし、情報、通信手段が発達している今日、地方が持つ魅力を見いだす人も多い。少子高齢化する地方・地域では、都市部と郊外・遠隔地との行き来、日常の移動などに不便があり、流出の大きな原因の一つであろう。これらの面に何らかの形で公的な支援を工夫することで道を探ることが必要である。また、食の安全性、自然素材の美しさ・使い心地の良さ等を重視した中規模の農業・漁業・林業、関連産業の新たな開発・振興を図ることは今後有望であう。そのためには、安心・安全・素材の質を重視する「価値観」を持つ消費者を増やす「科学的」「論理的説得」、広報が必要だ。こうした「価値」を保証することで、産品の付加価値を高め、地域経済を安定化させることができれば、長期的には若者の地域への定着が進むことになろう。

総務省は、次のように過疎地への定住・定着を勧め、現状を分析している。「地方への新しい人の流れをつくるため、都市地域から過疎地域等に移り、一定期間、地域協力活動を行いながら、当該地域への定住・定着を図る「地域おこし協力隊」を推進している。平成27年度には、全国673自治体で2,625人の隊員が活動しており、うち20代～30代が約８割を占めるなど、若者の持てる能力を活用した地域づくりの取組が広がっている」（内閣府, 2017, p.159）。若者たちは、都市部にはない過疎の地域それぞれがもつ「よさ」「魅力」を見出しているのだ。自然の豊かさ、人間関係、喧噪からの解放、スローライフ、素朴な生活環境、都市化された環境では得られない「新たな価値」を求めている若者がいることを示唆している。彼らの過疎地への定着を図るためには、環境整備のための一定の公的支援、「投資」が必要である。

延吉市の出稼ぎは、「地元」の産業の空洞化と若者の流出の悪循環を示すものである。「市場の論理」が地域に深くくまなく浸透し、私たちの生活と人間関係を全て支配するとき、私たちは最大の利益のみを求め他へ流出する。その結果、地域独自の「自発的」「自治的」な文化や催しは姿を消し、若者もまた活力を失ってしまう。延吉市の「出稼ぎ」が暗示することではないだろうか。

２．地域を活性化する「核」としての青年・青年会（概念図の提示）

新たに21世紀が幕開けして既に20年弱が経過した。大都市周辺、農山漁村など地方、あるいは島嶼に位置する各地・各地域の若者・青年会の地元に根ざした活動を明らかにしてきた。人口の減少や過疎化に直面している地域のここ10年間の変貌・変化と維持・活性化するための努力の現実を、若者・青年会との関わりを通して事例的に検証しようと試みた。その中から得られた結果と示唆をまとめておこう。

①進む総人口の減少　日本の総人口は、地方に限らず平成23年（2011年）から一貫して減少している。少子高齢化が、一過的なものではなく、今後さらに国全体で進行していくことは確実であると予測されている（総務省統計局, 2016）。人口減少の時代は今までに私たちが経験したことのない社会の様々な面での「縮小」を伴う可能性が高い。各地で現状維持に向けた懸命の対策・努力が図られているが、社会全体の構造的な変化が基盤にあることから、即効的な解決策を見出すのは容易ではない。

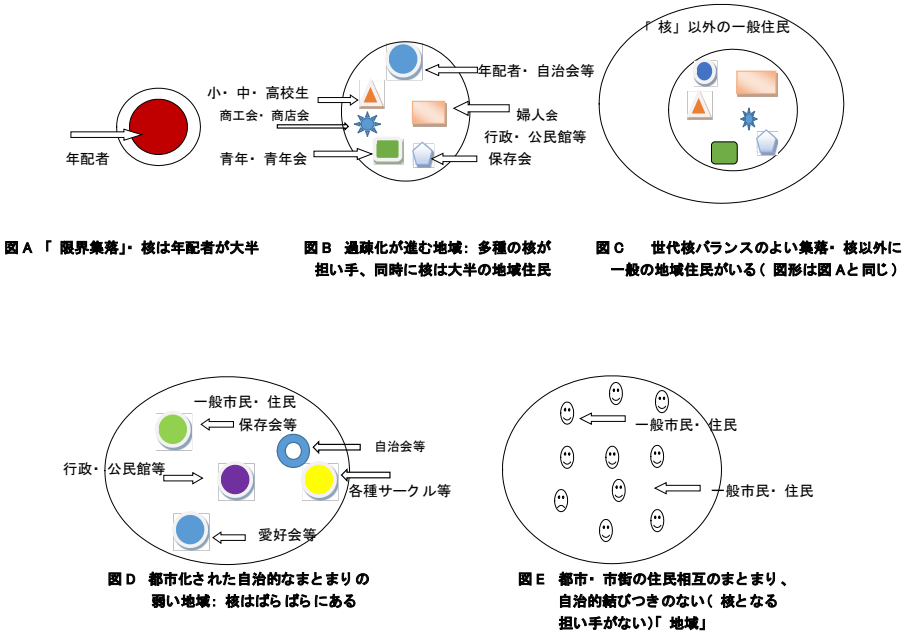
②地道な青年・若者の活動への注目　地域で生活し、地域住民の一人として町や村、集落の管理や運営に積極的に参加する青年の現実が明らかにされていない。少子高齢化が進み、日常品の調達や医療・福祉施設の利用などに日常の生活への支障も地域によっては生じかねない。集落や地域を維持するためには、そこでの暮らしを成り立たせる住民の協力や協同作業や管理・運営、文化や伝統行事の継承など、個人を越えた集団としての人々の「関わり合いと営み」がある。こうした地域全体の生きた現実がどのように展開され、そこに生きる人々の暮らしや文化がどのように継承されているのか、これらの点を次代を担う青年に焦点を当てて明化することは、将来を展望する上で不可欠である。

③地域を支える青年の力の評価　高校生、各種学校の学生・大学生、会社員、等を取り上げ、現代青年の一面を一般に分析し論じられることは珍しくない。しかし、過疎化する村や町で地域住民の自治的活動や行政の取り組みに参加する社会人青年や青年仲間（青年会など）がいること、そして彼らが地域を維持し、地域の存続に不可欠の存在であり、極めて大きな役割を果たしていることが、研究の視点から光を当てられてこなかった。青年・青年会が地域社会の運営、継承存続に大きく関与し、その中核にいることは、日本に独特な事柄である。青年の自治的自律的な活動として研究的に明らかにすることは重要である。青年・青年会の活動は、地域社会を支え存続

させる原動力であり、欠くことのできない重要な「核」である（図２）。

地域の伝統文化、芸能、お祭りや行事の継承、発展させている青年・青年会の現実と実態・実像は、一般にはほとんど知られていない。心理学においても地域に入り、現地の状況把握しながら研究を進める民族誌的接近など質的な研究の重要性が指摘されている（坂西, 2016）。しかし、地域の活性化や「地方創生」が謳われながらも、地元で暮らし地域社会の保全をし、集落の日常の生活の課題を解決するために住民同士の協力、話し合いに参加する若者の現実に目を向ける研究はきわめて少ない。彼らがいてこそ伝統的な慣習・習慣・儀式、さらには地域の文化・芸能の継承と発展は可能になっていることを把握し理解することは、地方・地域の過疎化問題を研究するときに欠かすことのできない中核的な事柄である。日本各地の地元に定着し、そこに根を張って生きている若者・青年の実態の一端を本研究では明らかにすることができた。

④過疎地・都市部の構造的把握と地域自治を支える「核」の存在　各地の過疎化の現実を事例を通してみると、地方･地域の自治的集団としてのまとまりを維持し、集団として機能させるには、それらを担う担い手が必要である。過疎化あるいは都市化の程度によって、その担い手に変化が生じると考えられる。集落・地区を中核となる担い手の有無によって５種類に整理したものが図２である。本研究で取り上げた地域を試行的に大まかにＡからＥに当てはめて考えてみよう。図２の中の図Ａ（大鹿村）は、過疎化が著しく進み、集落全体が高齢化している地域だ。図Ｂ（泰阜村・西米良村）は過疎化が進んでいるが、住民が老いも若きもそれぞれが担い手集団として核になり、集落の自治を維持する地域である。集落の住民のほぼ全員が、地域自治の担い手になる。図Ｃ（八雲町・粕屋町・南風町・石垣市）は地域の自治を維持する担い手集団・核がしっかり存在し、なおかつそれ以外の一般的な住民が沢山存在する地域である。核となる担い手も若者から年配世代までバランスよく存在し、自治体として比較的安定した地域である。図Ｄ（鶴ヶ島市）、大都市近郊の市区など住民の地縁血縁関係が少なく、地区全体の自治的なまとまり･運営が弱い場合である。とはいえ、公民館、保存会、商工会、サークルなど、独立した核、潜在的な核はある。図Ｅは、住民は個別ばらばらに生活し、集落・地区集団としてのまとまりや住民相互の関わり合いがきわめ



図Ａ「限界集落」・核は年配者が大半　図Ｂ　過疎化が進む地域：多種の核が担い手、同時に核は大半の地域住民　図Ｃ　世代核バランスのよい集落・核以外に一般の地域住民がいる（図形は図Ａと同じ）

図Ｄ　都市化された自治的なまとまりの弱い地域：核はばらばらにある　図Ｅ　都市・市街の住民相互のまとまり、自治的結びつきのない（核となる担い手がない）「地域」

図２　概念図：集落・地区のまとまり・自治的活動を支える核となる集団の有無と過疎化（都市化）

て希薄な場合である。地域を活性化させる担い手集団、潜在的な核が存在しない。

本研究で取り上げた各地の事例をこの概念図に当てはめてみると、大まかではあるが集落・地区の現状と今後を視覚的に展望することができる。多くの過疎地は図Cに近似した状態にあり、核となる青少年・若者層が縮小し、相対的に年配者が拡大する。その結果、年齢の異なる核種のバランスが崩れ、年配者が多数を占める図Aへと急速に移行してしまう。現在、図Cの好適な状態にある地域・地区も必ずしも安泰ではない。各核種を安定して増強ないし補充・維持しない限り、全体の各核種間のバランスは崩れ、図B、図Aへと移行していく危険性がある。他方、都市化し人口が流入すると、地域・地区の潜在的な担い手は増加する。しかし、潜在的な担い手を「核」にまで移行させるには、意識的に組織する人々が必要になる。住民の自然増に任せると地域・地区の人間関係は希薄化し、自治機能は弱まる。その結果、Cの状態は、図D、図Eへと移行していくであろう。

本研究で取り上げた事例は、過疎化している地方・地域と、人口が増加する大都市近郊であり対照的である。しかし、いずれも、地域社会の維持・活性化のために、若者が地道な自治的な活動を行っている点で共通している。概念図から示唆されるように、地域の若者の力を正当に評価すべきである。

⑤経済基盤を作るためのスローライフへの価値転換　地方の魅力と新たな価値観の創出が重要だ。地域に産業を興すに当たって、自然の素材、環境を生かす事への価値の転換、安全・スローライフの付加価値を高める公的支援が必要である。「国の支援事業の成果もあり、若者が農業に踏み込む流れが続いている」(農業新聞, 2017)、といわれるように、国も公的支援の必要性を認め行っている。「都市から農山村に移り住んで農業を営む「田園回帰」の動きが、若者の間で依然として活発である」同上紙)、都市にはない新たな価値を求める志向が認められるている。反面、農業後継者の減少傾向は続いており、「実家を継ぐ自営就農者が減っているのが課題。農家後継者への経営継承を支援していく必要がある」(農業新聞, 2017)。「美しい自然にあこがれ、移住してきた村民も多く現在では約２割に上ります」(長野経済研究所, 2017)、長野県大鹿村の近況である。1940年代から芸術家や翻訳家が移住していたという。近年は「20代や退職後の60代の方が多く、自然農法など農業に取り組んで…、…耕作放棄地を復活させ、独自に都会などに固定客を持ち、宅急便などを使い農作物の安定的な販売を行っています」(長野経済研究所, 2017)。自然を生かした生活基盤作りへの「価値転換」の一つの例であろう。

とはいえ、価値転換を図るには、地域での日常の生活基盤を整えることが不可欠である。集落の高齢化が進み、富山市八尾地域に一軒あった商店が閉店し、店はなくなった。「動くスーパー」が、山間地を車で巡回し住民の生活の糧を供給している。市街地と集落を結ぶ交通も難しい問題だ。蟹寺集落では、市の中心部と結ぶ「過疎バス」を平日一日４往復、日曜祝日は３往復、実験的に走らせた。しかし、大半の住民は、自家用車を利用し、公共バスは殆ど利用しない。「動くスーパー」も「過疎バス」も市が補助金を投入して運営している（高田・清水, 2010)。人口の減少に歯止めをかける根本的な解決策は見いだせず、展望は開けていない。珍しい事例ではないところに深刻さがある。東京に新幹線で通勤できる首都圏の市町村（佐久市、湯沢町、宇都宮市、小田原市）でさえ新幹線通勤費を補助している（乗り物ニュース, 2017)。住民の転出を抑制し、移住者の拡大を図っているのだ。過疎地に限らず、日本全体に広がる問題である。

⑥青年の成長・発達を促進する自治的地域活動　勤務時間を管理される若者にとって、仲間と作る自治的な集団的活動は、作り出すことさえ年々難しくなっている。青年会は、地域に暮らす若

者が自発的に作り運営する自治的な集団活動だ。自治的活動は、ボランティア活動への参加や成人式への協力など社会性をもち、スポーツ、レクレーション、懇親会など仲間との交流や行事・イベントの実施等、友好的（遊好的）性格をもち、さらに市民文化祭の開催や伝統行事・文化の継承・創造といった文化的特長をもつ。地域によって異なるが、自治的活動の内容は多彩である。

祭り、成人式、子ども会・キャンプ、市民文化祭、マラソン・スポーツ祭り、伝統芸能の保存、クリスマス･サンタプレゼント家庭訪問、そして社会問題の学習や仲間との研修旅行をし、レクレーションを楽しむなど、全国各地で多彩な活動を展開している。年末には、東京都と共催で全国各地の青年が集うスポーツ・文化の祭典「青年大会」が開催されている。趣味のサークルや同行者が集まる同好会とは異なり、地元に密着した自分たちの生活に根ざした活動を展開している。こうした青年・若者は多くはないが、地域の担い手として確実に大きな役割を果たしている。かれらのほとんどが口にする言葉は、「仲間と接するまでは職場と家の往復の毎日で、変化のない充実感のない日々を過ごしていた」、「引っ込み思案で、人前で話したり、自分の考えを出したすることができなかったが、少しずつできるようになって嬉しい」、「大変だけど地域の子どもとや大人の人たちと行事やイベントを一緒にやるのが楽しく、満足感が大きい」、などだ。彼らのことばは、個別化する傾向の強い現代社会にあって、若者は仲間との関わりで心身共に成長し、広い視野を持った自己を確立していくこと示している

青少年が、宗教的活動の一環として行う集団的活動は、海外でもあるが、本研究で焦点を当てた青年や青年会のように地域に溶け込み、社会的視点を持ち、特定の主義主張に偏しない若者の自立的・自治的集団活動はきわめて珍しい。彼らは、ボランティア集団ではないのである。若者の心理的自立を促進し、社会的行動力や社会性を培う仲間集団の機能と性質を研究の視点から質的に明らかにすることは、大きな意義があり、コミュニティ形成の視点からもさらに検討されなければならない課題である。

3　変貌する地方・地域と未来を開く若者・子ども

1．寸断される人と人のつながり

本研究を通じて明らかになったことは、過疎化の進行する地域の文化が消えつつあることである。地域の生活や文化には、封建性・男尊女卑など否定的な面がいろいろあった。それでも、地域でお祭りを催したり、自治体が研修会をもったり、あるいは演劇など独自な文化活動を青年が始めたり、みんなで力を合わせ、地域を活気づかせ、生活を豊かにする活動が沢山あった（日本青年団協議会, 2001）。

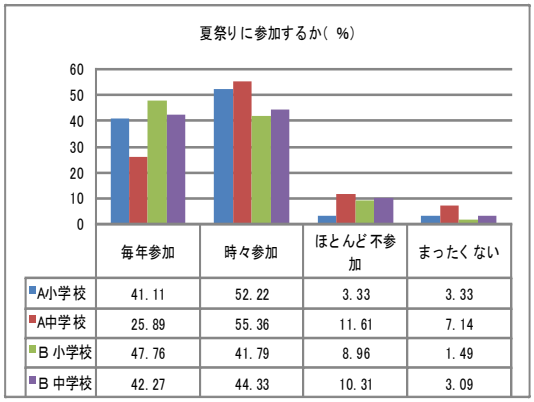
近年、各地で行う行事や自治的な活動への青年の取り組みが弱くなっている。例年やっていたお祭が中止になったり、町や村の青年会の活動が維持できなくなったりしている。こうした窮状に拍車をかけるものの一つが、自治体の合併ではないか。合併で、経済的効率化がさらに求められ、そのため山間僻地はいっそう不便になり不遇を託つ。住民は離散し､集落は次第に姿を消していく。前述の西都市と合併した宮崎県の東米良村はその一つであろうか。全国に広がる過疎地域の拡大は（総務省自治行政過疎対策室, 2009）、徐々に日本の地域社会全体の崩壊が進んでいることを示唆している。中でも金銭に換算できない、損得勘定を抜きにした日常の関わり、血の通った人間的な結びつきが弱くなっている。こうした逆境にありながら青年は、伝統芸能を継承したり、人形劇、クリスマス・プレゼント、子どもキャンプ等々をしたり、地域に根ざして地道に活動している

（日本青年団協議会，1998）。2006年度に全国の青年団･青年会で行われた子ども事業は74件に上っている（日本青年団協議会，1998，2006）。今居住する地域に積極的に関わり、粕屋町青年団、南風原町青年団の事例は、地域全体の住民相互の交流が若者たちを活気づかせること、そして地域との親しい交わりと支援があれば彼らは町民の要請に誠実に応えることを実証している。

①地域の行事と子どもの関わり　青年会があるかないかに関わりなく、子どもにとって人々が交流し、出し物や芸能、スポーツを楽しむ場が地元にあることは、自分の住むところへの愛着形成には大切なことである。研究Ｉで取り上げた鶴ヶ島市で、地域の文化と子どもの関わりを明らかにするために小学生と中学生を対象に質問紙調査を実施した。調査は2006年12月に実施した。調査対象者は、小学校６年生161名（男子86名，女子75名）と中学校２年生209名（男子111名，女子95名，不明３名）であった。質問紙は、主に５つの内容から構成されているが、ここでは行事と伝統文化・芸能の２つに焦点を当てる。一つは、地域のお祭りや行事に子どもたちがどれだけ参加し、どのように受けとめているかをたずねる質問項目群である（「地域のお祭りと子ども」）。「地域のお祭り・夏祭りに参加したことがありますか」「地域のお祭り・夏祭りにいくときはだれといきますか」「地域のお祭り･夏祭りは楽しいですか」「『どんど焼き』に参加したことはありますか」、などである。第二は、古くから伝承されている地域の伝統行事と子どもの関わりをたずねる項目群からなる質問である（「地域の伝統行事と子ども」）。「『すねおり雨乞い』行事は楽しいですか」「『高倉獅子舞』を見たことがありますか」、の２項目である。

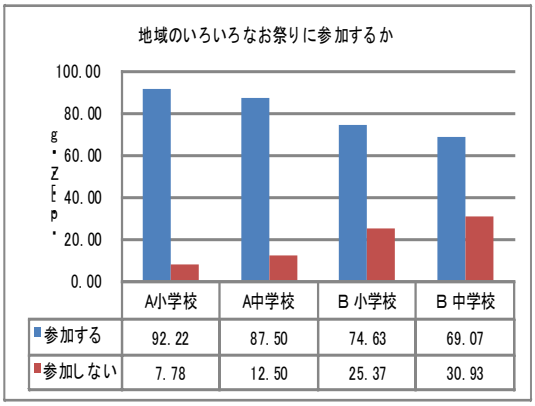
②世代間交流　「夏祭り」への参加は、参加する子どもの比率が大きく、「ときどき」参加する子どもを含めると、全体では参加率は８割弱に達する。図中のＡは旧村地域であり、昔からの集落が残る地域の学校で、Ｂは新興住宅地にある学校である。地元の「夏祭り」は子どもにとって身近な催しものになっていることがわかる（図３）。中学生に比べ小学生の参加が若干多いが、大きな違いではない。「夏祭り」は楽しいかとたずねると、全体の８割以上の子どもが「とても楽しい」、「けっこう楽しい」と回答している。小学生も中学生も「夏祭り」を初めとする地元のお祭りを楽しいものと受けとめている。昔から行われてきた地元の祭りは、今でも老若男女が集い交流する場であり続けている。

地域には昔から行われてきた地元のお祭りもあれば、「公民館祭り」や「産業祭り」など現代的な要請から新たに創り出されてきたお祭りもある。子どもたちは、今地域にある各種のお祭りにどの程度参加しているのだろうか。図３を見ると、多くの子どもが地域の各種の祭りに参加している。住んでいる地域の違いが参加率の違いに若干反映しているのかもしれないが、７割以上の子ども



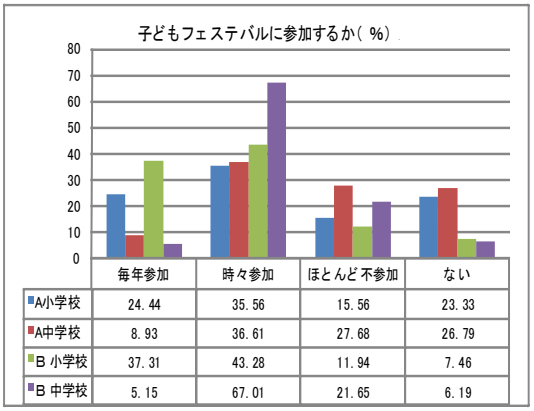
	毎年参加	時々参加	ほとんど不参加	まったくない
A小学校	41.11	52.22	3.33	3.33
A中学校	25.89	55.36	11.61	7.14
B小学校	47.76	41.79	8.96	1.49
B中学校	42.27	44.33	10.31	3.09

図３夏祭りへの参加



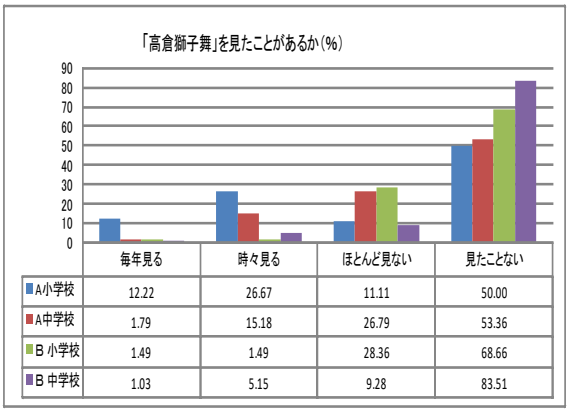
	A小学校	A中学校	B小学校	B中学校
参加する	92.22	87.50	74.63	69.07
参加しない	7.78	12.50	25.37	30.93

図４ 地域の祭りに参加するか？



	毎年参加	時々参加	ほとんど不参加	ない
A小学校	24. 44	35. 56	15. 56	23. 33
A中学校	8. 93	36. 61	27. 68	26. 79
B 小学校	37. 31	43. 28	11. 94	7. 46
B 中学校	5. 15	67. 01	21. 65	6. 19

図５　子どもフェスティバルへの参加



	毎年見る	時々見る	ほとんど見ない	見たことない
A小学校	12.22	26.67	11.11	50.00
A中学校	1.79	15.18	26.79	53.36
B 小学校	1.49	1.49	28.36	68.66
B 中学校	1.03	5.15	9.28	83.51

図６　高倉獅子舞を見た経験

が何らかの祭りに参加している（図５）。B地区（新興住宅）に比べA地区（旧村地域）の子どもの祭りへの参加率が大きくなっている。いずれにしても７～８割の小中学生が参加しており、祭りは子どもにとって魅力的なものであることを示す結果である。

祭りの魅力を「子どもフェステバル」を例に見てみよう。６割から７割の子どもが参加したことがあると回答している（図５）。どの地域も似た傾向を示しており、小学生も中学生も同じような割合で参加している。「子どもフェステバル」が、「けっこう楽しい」もしくは「とても楽しい」と回答する子の割合は、合計で７割弱（64.87%）になる。小学生も中学生も共にフェステバルを楽しんでいることがわかる。地域差があり、新興住宅地の子どもの方がフェステバルに対する反応は肯定的である。フェスティバルは、歴史の新しい子ども向けの行事、町に創り出された「地元」の文化として受け入れられている。地域の文化が、子どもにとって世代間交流と人間的なつながりを経験する場を提供しているのである。

それに対して、高倉獅子舞は地域の特徴を強く反映している。昔ながらの地縁が残るA地域の子どもの方が、新興住宅地Bの子どもよりも獅子舞を見る割合が大きくなっている。伝統芸能は、地域が限定され、より局所的に継承されていることがわかる（図６）。それは、獅子舞が、特定の地域の氏子を中心にした保存会によって伝承されているからである。少子高齢化が進むと、集落単位で維持されてきた伝統や行事や民俗・芸能は、担い手である子どもや若者がいっそう少なくなり、維持できなくなってしまうことを、この結果はよく示している。子ども向けに新しく創られた祭りの「子どもフェステバル」が子どもに歓迎され、広範囲に地域全体の文化として定着しているのと対照的である。同時に、新しい地域文化を創造するには、住民による工夫を凝らした企画と地道な準備があり、また子ども会をはじめとする各種団体、サークルの日常の活動があること、そして緊密な連携と協力があることを見逃してはならない。

地域で催行される各種の行事・イベントに参加することで様々な恩恵があることは広く認められている。内閣府の調べでは（内閣府，2004)、地域の活動などへ参加することを通じて感じることには､「自分と違う年齢･世代の人たちとの交流が広がった」(78.2%)が１位にあげられている。鶴ヶ島市の事例が、行事を通じて世代間交流が促進されることを裏付けている。

２．青年・青年会の役割・機能と社会的アイデンティティ

今地域社会にある問題の一つは、世の中のペース、流れに乗れない子どもや青年は置いてきぼりにされてしまうことである。少しの障害があったりすると周囲のペースについていけなくて、学校を卒業したあとも友達関係がなくなってしまう。石川県の青年（26歳）の例であるが、彼は、

学校でいじめを受けて不適応になった。卒業してガソリンスタンドで働いているが、お店には自分をいじめた子も来る。すると、給油にでなくてはと思うのだが、身体が拒否して出て行けなくなってしまう。こうした「弱者」が地域の中で孤立し切り捨てられてしまう。彼は、青年団で仲間を得え、共に地域活動をする中で、心の傷を癒していった。青年団、青年会といろいろな呼び方をしているが、地域の中にある青年の自治的な活動は、「弱さ」を抱える若者を、人間関係を通して仲間としてつなぎとめる働きをしている。地域の青年会は、競争によって蹴落とされる青年を正面から受け止める、大切な役割を果たしていると考えられる。

①北海道八雲町「若人の集い」 北海道二海郡八雲町（図７）の青年会「若人の集い」が、今年で設立30周年を迎えた。これは、「若人の集い」が、広く仲間を受け入れ共に地域の中で活動してきたことを裏づけるものである（若人の集い, 1998, 2008)。町の広報（八雲町, 2009, なもないミニコミ誌編集室, 2005, ）によれば八雲町は北海道渡島半島の北部にあり、道南の拠点都市函館市と全道有数の重工業都市室蘭市の中間に位置する。東は内浦湾（噴火湾)、西は日本海に面し、北は長万部町、今金町、せたな町、南は森町、厚沢部町、乙部町と接している。面積は約956平方㎞で渡島支庁管内最大の面積をもつ。渡島山系をはさんで、東は遊楽部川、野田追川、落部川が流れ、西は相沼内川、見市川が流れており、農業・漁業ともに恵まれた立地である。

図７　八雲町（八雲町, 2009より）

町名は明治14年に徳川御三家の一つ、尾張藩（名古屋）の旧藩主徳川慶勝侯が、豊かで平和な理想郷建設を願い、古事記所載の日本最古の和歌である須佐之男命（古事記）素盞嗚尊（日本書紀）（スサノオノミコト）が読んだ「八雲立つ　出雲八重垣妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を」を引いて名付けた。平成17年10月１日、渡島山系をはさんで隣り合っていた、渡島管内八雲町と檜山管内熊石町が新設合併を行い、新「八雲町」が誕生した。この合併により日本で唯一太平洋（内浦湾）と日本海に面する町になったことにちなみ、新たに「二海郡」と命名された。

交通では幹線道路として国道３路線があり、函館市と札幌を結ぶ国道５号、渡島半島を横断し、太平洋と日本海を最短距離で結ぶ国道277号、日本海側の幹線道路である国道229号が走り、北海道の大動脈となっている。鉄道は、国道５号と平行してJR函館本線が通り、青函トンネルによって本州と結ばれている。さらに北海道新幹線の整備計画では八雲町に新幹線新（新八雲駅：仮称）が設置される予定だ。高速道路網は、道央自動車道の整備が進み、平成18年11月に八雲インターチェンジが完成し、道央圏とのアクセスが容易になった。空路は、町から約80㎞の位置に函館空港（函館市）があり、空港から町までの所要時間はおよそ車で１時間45分程度である。

気候は太平洋側と日本海側で異なり、太平洋側では年平均気温7.9℃、日本海側では暖流の影響で年平均気温9.1℃となっている。降水量は太平洋側が夏に多く、冬に少なくなるのに対し、日本海側では冬に多く、夏に少なくなる。また太平洋側では海洋性気候のため夏期に霧が発生するこ

とがある。この気候を利用して八雲町では古くから酪農業が発展した。人口は減少傾向にあり、平成20年12月末日現在の住民基本台帳で19,473人、世帯数は8,684世帯である。毎年徐々に減少が続き、核家族化、高齢化も進んでいる。町は施策として積極的な移住促進に努めている。

この自然の豊かな八雲町（八雲町, 2005）には、上述の「若人の集い」が結成されている。集いには、高校生も参加している。牛肉加工工場に勤める青年、役場職員、等々、参加メンバーはいろいろだ。農業青年、酪農青年もいるが、仕事はなかなか大変だ。乳価が低迷する中、飼料が高騰しているからだ。今、牛は放牧している。牛が牧草を食べ、配合飼料・餌代を節約できるのである。農業も酪農も家族労働を中心にした仕事で、一人で作業をすることも多い。青年会は、彼らの仲間関係を広げ、住んでいる地域との関わりを作り出す場になっている。前述のように「若人の集い」は、今年で活動を始めて30周年を迎えた。その間に、八雲町は合併し、町の面積は広大なものになった。自治体の広域合併は、青年会の合併をも同時に引き起こし、活動を困難にすることが多い。青年の生活圏が小規模･中規模であれば、仕事が終わった後すぐにみんなで「団室」や「会室」に集まることができる。しかし、合併で青年会が広域になると、会員によっては「会室」に行くのに車で１、２時間かかる場合もある。日常的な活動ができなくなってしまうのだ。日常的に集まって自治的な活動ができることが、若者を生き生きさせ、地域を活性化することにつながるのである。

「若人の集い」は、今日に至るまで地道な活動を続け、まもなく発足40周年迎える。日常の仲間との交流、活動をどのように維持するかは、解決する糸口が見つけにくく、ますます大きな課題になってきている。そうした困難がある中で、地域に溶け込んだ活動を行っている。2016年度の会主催の事業は、会の元気の良さをよく示している。４月 春の町民演芸会、総会、５月 花見(上旬)、６月 獅子舞、８月 あついべや七夕祭り、ふるさとカレンダー製作、キャンプ、10月 まちづくりワークショップ、ふるさとカレンダー販売、12月 自然学習会、クリスマス会（中旬)、大掃除、３月 春の町民演芸会準備、通年 ミニ青研、レク交流・会員交流。この間会のとりまとめを続ける会長の富田さんは、勤めの傍ら実家の農業の手伝いもする。彼らは毎年自作の大型（ふるさと）カレンダーを作成している。地元八雲の四季折々の景色や風物の写真を一般から求め、月めくりのきれいなカレンダーにしている。夏祭り・八雲山車行列にも参加し、若人の会で飾りをつけ、地域を盛り上げるのに一役買っている。地域の人間関係が「ばらばら」になりがちな今日、緩やか日常的な繋がりを大切にし、独自に持続的な地域活動をする青年・青年会の存在は大きい。

②沖縄県南風原町神里青年団（会） 沖縄は、青年活動が活発で、それを支える地域の基盤が強いところである。もともと沖縄は日本ではなく、琉球王国であった。明や日本との中継貿易をし、有力者間の勢力争いはあったが、平和な国だった。沖縄県の中部に南風原町がある。大戦のときには壊滅的に破壊されたところだ。沖縄は慢性的な不況で、日本一就職率が低いところだといわれてきた。ところが､青年に聞くと楽観的で､｢食えないことは無い｣という。沖縄伝統の｢エイサー｣は各地に継承されている。彼らがいなくなると地域の伝統行事がなくなるので、町内の人は青年の活動に期待している。お祭りになれば、自治会が物心両面で援助をし、日々準備をする青年の労をねぎらって差し入れもする。彼らもまた、小学生や中学生にエイサーを教えたり、祭りに子ども向けの店を出したりし、住民から信頼を得ている。地域の人々と若者の互恵的な関係をこの事例はよく示している。

沖縄・八重山のエイサーは全国的によく知られている。エイサーの起源は15,16世紀に遡るという。仏典を踊りながら唱える“念仏踊り”を原型とし、沖縄独自の仏典踊りの形態であるエイサー

へと発展したという説や、「李朝実録」（1479年）のなかに当時の那覇の記録がり、そのころが始まりだという説もあり、確定していない(沖縄全島エイサーまつり実行委員会, 2017)。エイサーは、各地区の青年会が地域おこしで復活させたり、新たに取り入れたりして行っている。神里のエイサーの歴史は比較的新しく（事例４）、1985年（昭和60年）に旧玉城村（現：南城市）奥武に指導を受けて始まった（南風原町観光協会2017)。2011年には、「神里エイサー　25周年祭」が開かれている。エイサーの継承は、青年会によって担われていて、若者が地域をもり立て、伝統文化を守り新たに創造していることがよくわかる。

1872年明治政府により琉球藩設置、1879年に沖縄県が設置され、日本に帰属させられるが、琉球は日本本州とは社会の仕組みと制度が大きく異なっていた。1972年沖縄返還があり、本土復帰が実現した。「全国45都道府県の青年団組織でつくる日本青年団協議会（日青協）の会長に南風原町議の照屋仁士さん（38）が就いた。沖縄県からは初めての会長である。照屋さんは、「日青協は沖縄の復帰運動の時に大きな役割を果たしており、その恩返しの意味も含め、全国に貢献できればと思う」と青年会の視野の広さを語っている（琉球新報, 2015)。彼は、2010年に町議に初当選し、今２期目を務める。若者は、一地方、地域に生きるとともに、海外にも目を向ける、国際化の時代にふさわしい視野の広さをもっている。

③福岡県糟屋郡粕屋町青年団(会)　福岡市のすぐ隣りの粕屋町にも青年会がある(事例２)。ベッドタウン化している町だ。市民文化祭では、青年たちが演劇を上演し人気を呼んでいる。仕事が終わった後、町から無償で貸与されている「団室」で練習を重ねる。町内の清掃も彼らの活動の一部である。地元に住む勤労青年や大学生が集まり、研修会や行事の催行、町の文化事業への参加等、活動の工夫をしている。青年会への参加には年齢制限があり、24歳で「定年」を迎える。青年会の卒業・退団式には町長をはじめ、町の主立った人たちが参加する。青年会は、昔から町の自治組織として地域を支え、生活と文化を継承する中核だったのである。退団式の重々しさは、今町は青年を必要とし、青年団に期待をしていることを象徴的に表している。

かつては、祭りを盛り上げ、「はち切れる」ほど元気のいい青年たちが青年会を運営し維持してきた。選挙に立候補し、市町村会議員・県会議員・国会議員になる青年団員も多数いた。対照的に、今や激しい競争が、青年たちを孤立させ、社会的弱者に仕立ててしまうところに社会の構造的な問題がある（小林, 2007)。

④地域の自治を支える若者・青年会　21世紀に入り、若者の雇用状況の悪化はずっと指摘され続けてきた内閣府, 2003)。未曾有の不況のまっただ中で、青年の日常は今まで以上に厳しいものであった（風間, 2007, 橘木, 2004, 本田, 2005, 中西, 2004)。その後、事態は改善しているのだろうか。「派遣など正社員以外の労働者の割合は、昨年10月１日時点で40.0%で、前回2010年調査の38.7%から上昇した」(東京新聞, 2015)。非正規雇用の拡大が指摘され、対象は若者にも広がっていると推測できる。「社会福祉法人が設置した基金に支援の相談をした人のおよそ７割が20代から50代までの働き盛りの世代だった。…相談の理由は、失業や低所得による生活苦が多かった…。…リーマンショック以降、非正規雇用のため安定した収入が見込めず生活に困窮している人が増えている」(NHK NEW WEN, 2016)。これは、失業などで生活に困っている人たちを支援するために設けた基金である。ここでも若者の貧困化が指摘されている。若者の経済的な苦境を指摘する記事がある。「注目すべきは「車所有の経済的余裕がない」。こちらはほぼ７割の回答率。購入時の初期投資コスト、各種維持費、そして車検代と定期的に多額の出費を求められるため、自動車の所有にはそれなりの経済的裏付けが求められる。その裏付け（に自信）が無い人が、新成人

の７割にも達している実態は、自動車関係者は大いに認識しておくべき」（不破雷蔵, 2017）。いずれも、若者の経済状況は楽観できるものではなく、危惧すべき状況にあることを示唆している。

日々の生活に追われ、仲間とくつろいで語り合う時間がもてる若者が今どれほどいるだろうか。各地にあった青年団、青年会が姿を消しつつある今日、地域に根付いて活発に活動している会・団もある（日本青年団協議会, 2009）。日本青年団協議会が主催する全国青年問題集会は、2016度で第61回を迎える。様々な課題・困難を抱えながらも青年会の活動は、維持継承されている。沖縄県から北海道まで各地の青年が集い、地域の現状と日々の活動の情報を交換し話し合い、交流し親睦を深める。地域を維持し活性化する積極的な働きをしている。表１は全国青年問題研究集会（全国青研）で開かれた分科会の一覧（2009年３月・2016年３月）である。地域に生きる若者が広い視野で、さまざまな角度から現状を改善する道を探っていることがわかる。農業関係の分科会が姿を消して久しい。そこには、一次産業、地方の厳しい状況が反映されている。地方の青年の就業状況は依然として厳しく、ここ10年分科会全体の数は減少傾向にある。７年前の54回の集会ではレポート数は109本あったが、61回集会では62本に大きく減少している。逆境にありながら、私が参加した分科会「私の生き方」を例にとれば、２泊３日各自の地域の様子から、仕事、家族、恋愛、悩み、そして将来展望などみんなでまじめに語り合い、自分に合ったより良い生き方を見いだそうと努力している（日本青年団協議会, 2016）。

表１　第54回・第61回全国青年問題研究集会　分科会一覧

第54回全国青年問題研究集会：分科会一覧		第61回全国青年問題研究集会　分科会一覧	
分科会名	レポート数	分科会名	レポート数
豊かな文化・スポーツ・レクリエーション活動を進めるために		**私たちの実践―事業編**	
１　地域から文化活動を進めるために	6	１　私たちの実践A	6
２　これからのスポーツ文化活動	6		
青年の暮らしを豊かにするために		**私たちの実践―学習・交流編**	
１　仕事と暮らしと活動と	9	２　私たちの実践A	8
集団活動を豊かに推進するための実践		**暮らしを見つめる**	
１　かたりあい・わかちあい	7	１　私の生き方	7
２　教宣活動	6	２　私とあなた	6
３　事業の活性化	9	３　私と仕事	6
４　市町村リーダー	8		
５　地域活動の意義	9		
６　組織強化・拡大	9		
不公正・差別をなくし明るく住みよい平和な社会・環境をつくるために		組織づくり	
１　社会を見つめて	9	１　市町村団の拡充	7
２　子どもと取り組む地域づくり	8	２　青年団と地域づくり	8
道府県単位の運動をどう組織していくか		３　組織運営	7
１　青年大会の意義を考える	6	４　次年度に向けて	7
２　道府県団運営について	11		
特別分科会	6		
レポート合計	109		62

職場の環境が大きく変わり、青年の自由に出来る時間がほとんどなくなり、さらに週末とはいえ休みを取って地方から連泊して東京で開催される研究集会に参加することは極めて困難になっている。とりわけ民間企業や中小の会社ではむずかしい。その結果、正確な統計はないが、市町村役場なと公的機関に勤める人の割合が多くなっていると推測される。

地域をつくる自治的活動、町内会や自治会の必要性はだれもが認めることは、すでに指摘した（内閣府, 2004）。青年会は、地域の自治的な活動の一翼を担っている場合が多いことは、各地で展開される彼ら主催の子ども事業や、全国青年問題研究集会で討論される分科会を見るとはっきりする。青年会が、同好会やサークルと異なる点は、多様な地域活動に関わり、地域の自治を担う役割を果たしている点である。町内会・自治会活動には、「区域の環境美化・清掃活動」、「住民相互

の連絡」、「盆踊り・お祭り・敬老会、成人式等イベントの開催」、「スポーツ・レクレーション」、「芸術・文化活動」、「地域作りへの参加・提言」等々があり（内閣府, 2003)、青年会の活動と大きく重なっている。青年会が行う地域における多種多様な活動は、同好会やサークルの活動の枠には収まりきらない幅の広さがあるのである。

⑤アイデンティティを形成し社会に目を開く若者　2009年３月の全国青研で持たれた分科会の一つである「語り合い・わかちあい」に参加し、彼らの地域活動の実際を見た。３日間の真剣な話し合いを見ると、いかに青年会・青年が自分の住む地域を前向きに真剣に考え、支えてきたかがわかる。参加者は７名で、北は北海道の長尾さん（31歳・農業)、埼玉の加藤さん（26歳・ホテル勤務)、静岡の伊井さん（31歳・看護士)、滋賀の中村さん（25歳・自営業)、鳥取の矢芝さん（31歳・嘱託職員)、岡山の池上さん（25歳・会社員)、そして宮崎の吉森さん（26歳・団体職員）だ。分科会では、山下さん（粕屋町青年会)・鳥澤さん（日本青年団協議会）の両司会のリードで、個々の参加者が地域・青年団の活動の現実、抱えている問題を話し合った。助言者の長谷川さん（50歳・元日本青年団協議会副会長）の、経験に裏打ちされた助言が、話し合いに具体性を持たせ、分科会を生き生きと活気づかせる。初日は、参加者が仕事の都合で夜遅くに到着する参加者が多かったことから、司会・助言者を含めてそれぞれ丁寧な自己紹介に留めることにした。自己紹介の中で、青年団が真剣に語り合う場であり、地域に根ざした活動の場であることが共通に語られ、「語り合い・分かち合い」が団活動にきわめて重要であることをみなが再認識していた。

二日目から本格的な話し合いに入った。参加者の年齢は、25歳～31歳で、団長、副会長、会長など、団活動をリードする役割を担っている人が多いのも特徴だった。参加者の職業は幅広い。団への参加者を増やすには、メールは有効ではなく、電話で直接話をする、団員以外の人にも声をかけバドミントンやるなど、直に関わり合い活動を共にすることの大切さが指摘された。野尻町青年団では、例会を持っても何も話さないで帰る人もいたことから、近況を報告し合う工夫をしている。青年団活動は、必要性があったから続いてきたもので、団活動の目的を持ち、「活動しなければならない」という前向きの気落ちを持つべきだとの意見もあった。青年団が他の団体と交流することで、活動の幅と地域の人間関係が広がることが改めて確認されたことも見落としてはならない。この点は前から指摘されてきたことであるが、長い目で青年団活動を担う仲間を育成する視点が必要だ。団活動が地域密着の活動であることを考えると、将来の地域を支える人材の養成につながるからだ。全国各地で若者によって「子ども事業」は取り組まれてきたが（日本青年団協議会, 1998)、地域作りの観点から、若者が積極的にこうした事業を展開する意義は大きい。

最終日、三日目は、二日間の話し合いをまとめ、地域に帰って自分なりに実践する課題を明確にし、みんなで確認し合う作業を行っている。年に一回とはいえ、全国各地の青年が、自分が住む地元での生活や仕事、仲間とのレクリエーション、文化活動、地域の行事への協力などについて、振り返りじっくり深く話し込むことは、彼らに大きな勇気と行動へのエネルギーを与えている。「いま日本の青年が持っている苦しみや悩み、またそれと青年たちがどのように闘い、克服していこうかと努力している姿こそ、この『日本の青年』のすべてであろう。青年たちは自分の持っている問題を、仲間の問題として、共に励ましあい、慰めあい、お互いの日常生活の実践活動の中から、従来とかく観念の空転に走りやすい自分たちの行動をいましめあって、話し合いや生活記録の広場を通じて解決への道を求めている」（日本青年団協議会瀬年団研究所, 1956)。これは第二回全国青年問題研究集会のまとめのことばである（日本青年団協議会瀬年問題研究所・横山祐吉)。地域に生きる青年の抱える問題・課題とそれに立ち向かう彼らの真摯な姿勢は、現在にも共通して

いる。

3.「実践的アクティブラーニング」と青年の自己変革プロセス（概念図の提示）

全国各地から青年が集まり、バスケット、柔道、演劇、写真展、のど自慢、各種の芸能スポーツ、文化活動を披露し、交流し、お互いを高め合う「全国青年大会」がある。一つの部門に「意見発表」がある。青年大会は毎年開催され、2017年度で66回を数える。若者が、家庭や地域で、あるいは会社や職場で日々行っている仕事や活動や交流を通して、自分の生き方、地域や社会が抱える問題について振り返り考える。悩み、苦しみ、試行錯誤しながら、改善を目指し行動し実践する。嫌なことばかりではない、そこには協力から生まれる信頼感、目標を成し遂げた喜びや達成感など積極的な体験がたくさんある。自らの目と行動を通して、家族、同僚、仲間（高校生含む）、地域の住民・子ども（幼児・小学生・中学生）との係りを客観的に対象化してみることは、今まで気づかなかった面に目を向けさせる契機になる。聴衆を前に「自分の生き方」を真摯に披露する意見発表は、青年の社会的な視野を大きく広げ、生活上の問題・社会問題に対する深い洞察力と改善へと向かわせる力を育成する貴重な機会になっている。

2015年度の発表を紹介する（日本青年団協議会, 2015）。巷で見る若者とは異なる彼らの一面を知ることができる。それは、彼らの考えや行動の「地味さ」でっあたり「深さ」、「まじめさ」、「地道さ」であったりする。飾らない「素」の彼らの「本音」に触れることができ、生き生きとした新鮮な青年の姿を見ることができる（名前は仮称）。

参加者は、当初７名の予定だったが、直前に急に仕事等で都合が悪くなり２名不参加になった。発表者が少なかったとはいえ、団仲間･地域の住民と関わり活動する姿を、地元ならではのエピソードを交えて生き生きと語り、聴衆に感動を与え強く惹きつけるものがあった。横田さん（石川）は、「公民館フェスティバル」での三味線演奏をきっかけに、各町会をまわり、住民の経験を聞き取り調査した。自分たちの足を頼りに地域の歴史・文化を地道に掘り起こす、優れた実戦である。彼女は、自らの目と耳、身体を使って人と関わる中で、自分が求めていたものを発見し新たな創造を生み出している。町民・年配者の経験を仲間と共有することが、喜びの「根っこ」（根底）にある。奥本さん（愛知）は、父が仲間を如何に大切にしてきたかを、父親を亡くした後初めて知った。彼は、父が心の奥深くに残してくれたものを、社内の「ハイタッチ挨拶運動」で実現した。互いがふれ合い、関わり合う中で交流と活気が生まれたのだ。座主さんは、仕事で福井市に転勤した。友だちもなく単調な毎日を送っていた。赴任地若狭町でたまたま青年団を知った。仲間と活動をする中で、生活空間が大きく広がり、「つまらなかった」彼の生活は充実したものへと変化した。小粥さん（静岡）は、雑草が伸び放題の耕作放棄地を見るたびに寂しくなった。休耕地を活用してひまわりを一面に咲かせようと思い、「ひまわりプロジェクト」に取り組んでいる。ひまわりの観賞を楽しみながら、子どもから高齢者まで町民が集い語らうことで、活気のある地域が生まれると確信している。猪股さん（北海道）は、入団してから今の自分を素直に認め受け入れることができるようになり、そのことが地域への関心を生み出す力になったという。サンタ（親から依頼を受け、サンタクロースに扮して子どもにプレゼントを届ける）・お祭り・キャンプなど、子どもが元気に活動できる場を青年団がつくることで、地域を活気づくと張り切っているのである（以上、坂西, 2015）。

いずれの発表も血の通った交流を通した地域作りを課題とし、中心的関心事にしている点で共通している。「地方創世」が謳われるが、地域に生きる若者の力なくして実現はできない。青年・青年団の生活に関わる地道な活動があるからこそ、地域・社会を見据えた率直な彼等の意見が生

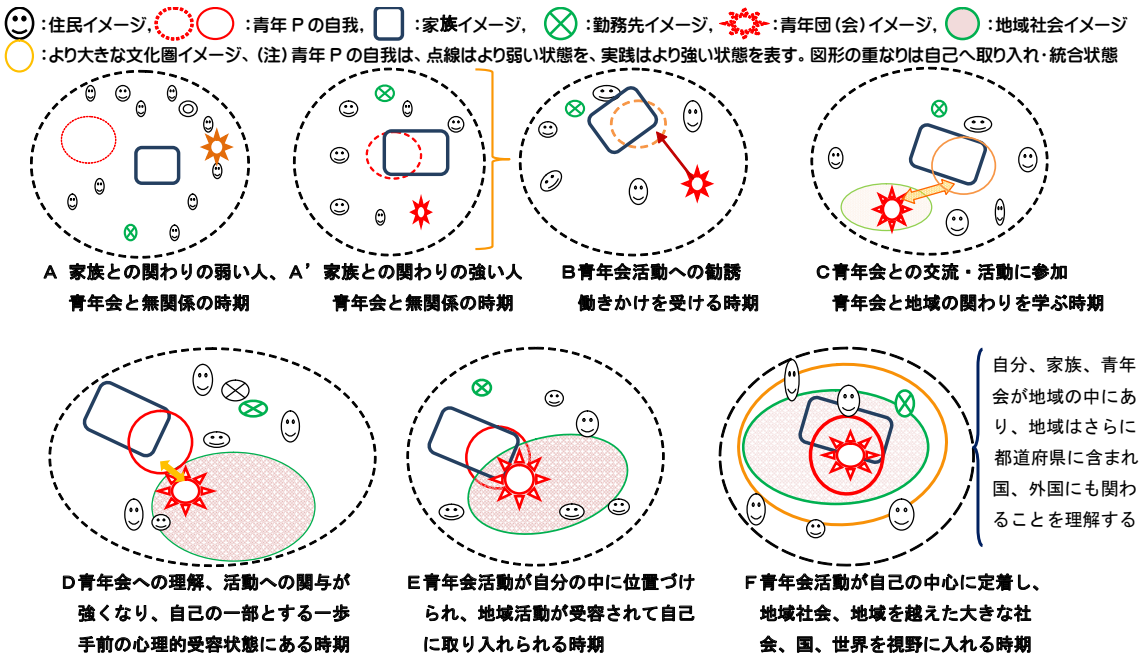


図８　青年会活動・地域の自治的活動が青年の社会性及び心理的発達を促進する過程に関する概念図

まれのだ。公の場で地域・地元での活動に基づいて若者が意見を発表する会が、彼等自身の手で開催されていること自体が貴重である。まさに、地球規模の激動の時代であり、世界にき目を開き、若者の意見や考えを発信ししなければならない時代だ。集団的自衛権、TPP、マイナンバー制、消費税率引き上げ、子ども（大人）の貧困、問題は山積している。OECD（経済協力開発機構）はヨーロッパ諸国を中心に日・米を含め34ヶ国の先進国が加盟する国際機関だ。日本の子どもの貧困率（特に一人親家庭）は、34ケ国中の先進国ではトップレベルにある。多くの若者が、正当な正義感に貫かれた意見を発表できる青年大会のような場がもっともっと必要である。

地域において青年が仲間と共に行う自治的活動は、彼等を社会的にも精神的にも成長させる大きな力を持っている。締め括りとして青年が地域活動をする中で自己同一性と社会的アイデンティティを確立し、「自己変革」していくプロセスを考察する。図８は、青年の自己・自我の発達・変容の過程を概念的に図式化したものである（概念図））。図中の各要素は、実際に存在する実体ではなく、個人の心理的空間に存在すると仮定した表象・イメージである。一人の青年（Ｐとする）の内面にある自己･自我、市民･住民の表象、家族の表象、職場の表象、地域の表象、青年団（会）の表象、より大きな社会（市町村、都道府県、日本、外国、等）についての表象である。地域活動に関わる以前の青年Ｐの自己・自我が、青年会に関わることによって、青年会を初めとする各種の要素（表象・イメージ、以下イメージと略す）との関係を変化させていく過程、言い換えれば自己・自我に取り込んで変容していくプロセスを心理的空間として構成し概念図にして可視化したものである。青年Ｐは、２つのケースを仮定した、一つはＰと家族の関係は薄く相互に関わりがない場合（自己・自我イメージと家族イメージが分離し交差しないＡの図）と、関係が強い場合（二つのイメージが重なるＡ′の図）である。自己・自我変容の過程は図８の上段左端から右へ、さらに下段左端から右に進行する。以下のプロセスは、便宜上、初期状態Ａ′にある青年Ｐを前提に考える。つまり、地域社会を特には意識せず、取り立てて関わりの強い集団やサークル、同好会等をもたず、勤務先と家族の関係に限定された日常を送っている青年Ｐの心理的空間をモデルとして

考察する。

プロセスA′　A′は、青年Pが仲間との地域活動に参加する前の心理的な空間・精神的世界である。「地域」という認識をPは特に持っていないが、青年会の存在は知っている状態を仮定している。Pは家族関係の中にどっぷり浸かっている状態だ。会社・職場は、存在するが、心理的な世界で大きな位置を占めるわけではない。特定の個人や集団との強い関係もない。

プロセスB　主要な関係は家族関係である。Bの時期でもPには「地域」は意識されていない。Pの心理的な世界はA′の状態のままであるが、青年会からPに対して活動への参加の働きかけ、勧誘が行われる時期である。Pは特に青年会に強い関心があるわけではない。他はA′の時期と変わらない。

プロセスC　青年会に対してある程度の興味を示し、積極的ではないが少しづつ自分から関わりを持つ時期である。青年会が「地域」の中で活動していることに気がつき、「地域」が自覚されてくる。青年会が、同好会、趣味のサークルとは違い、教育、文化、伝統芸能、娯楽、地域の行事等、日々の生活、社会的活動と地域の自治的運営に広く関わる自発的集団であることを理解し始める。この段階でも自己・自我の変容は生じていない。

プロセスD　青年会への理解が進み、仲間と共に地域活動をすることを積極的に受け入れ始める時期である。青年会との心理的距離がなくなり、自己・自我の一部に取り込む一歩手前の状態である。青年会が「地域」の中にあり、青年会の活動は地域の維持・運営に関わることを知り、「地域」の認識が深まる時期である。

プロセスE　青年会が自己の一部として取り込まれ（図中の２つのイメージの交差・重なり）、位置づけられる時期である。活動の中で仲間と協同し深く話し議論する中で自分についての認識・自己イメージが明確化し、社会的アイデンティティが確立してくる。この時期には、地域の意味を考え、地域は自分の存在基盤であることを認識する。青年会を自己に取り込み自己概念の一部として位置づけ定着させ始める。自分が積極的な方向に変化・変容していることに気づき始める。同時に、矛盾に気づき、葛藤を経験する時期でもある。

プロセスF　青年会全体を重要なものとしてを自己に取り込み、自己・自我の中心部に組み込む時期である。青年会自体が地域の中にあり、自分自身や家族、近隣の人々、友だちもまた地域共同体の一員であることを自己・自我の中心部分に位置づける。地域はさらに郡、市町村、都道府県に包含されることを理解し、より広く日本の国や海外の国々との関わりをも視野に入れるようになる。葛藤を抱えながらも、前向きに地域活動をする中で、青年会の独特の魅力を発見し気づく時期である。自らを肯定し受容する自分がいることを知り、人との関わり、気の置けない仲間が身近にいることの重要性を認識する。

すべての青年が、概念図で示した自己変容のプロセスをスムーズにたどるわけではない。活動が停滞したり、人間関係が煩わしくなり会に顔を見せなくなったりと、現実は様々である。それでも、彼等は異口同音に青年会と仲間の「ありがたさ」「魅力」「かけがえのなさ」を言う。「今まで萎縮していた自分、人前では何も話せなかった自分が話せるようになった」「仕事場と家の往復だけだったが、生活が生き生きとした」「イベントなどみんなで苦労して成功させた後の喜びとうれしさが大きい」「力を合わせてやったときの達成感が忘れられない」「まじめに話しを聞いてくれる仲間に初めて会った」と。青年が地域と関わり、自らの暮らしの中で自治的な活動をするところに、人格の深部にまで及ぶ大きな影響が生まれる源泉がある。単なる「暇つぶし」のための個人の集まりや義務感だけで行う活動ではなく、広がりのある目的を持って地域社会に溶け込みながら展

開していることが、彼等の社会性の発達と視野の拡大につながっている点が重要である。概念図は不十分ではあるが、複数の各地の事例研究から青年の社会的・精神的発達の過程を可視化して客観的に一般的に捉え、検証するために有意義であり有効である。事例研究を積み重ね、さらに精緻化することは今後の課題である。

引用文献

坂西友秀（2016）教育における『社会問題』と心理学研究―社会心理学的考察と展望―教育心理学年報 第55集　pp.183-202.

坂西友秀（2015）全国青年大会　意見発表　1月15日　日本青年団協議会・東京都教育委員会主催

坂西友秀・尾崎啓子・吉川はる奈・細渕富雄（2016）学校教育を通して見たフィンランドの矯正教育（Ⅰ）埼玉大学紀要教育学部　第65巻1号　49-67.

DailyNK Japan（2016）中国朝鮮族、人口減少の訳　8月27日 (http://dailynk.jp/archives/72886)

南風原町観光協会（2017）南風原町内で見られるエイサー 各青年会ごとに異なる踊りに注目！ (http://www.haebaru-kankou.jp/traditional/entertainment.html)

本田由紀（2005）若者と仕事　東京大学出版会

不破雷蔵（2017）「経済的余裕が無くて車を所有できない」新成人は7割に 1月9日（http://bylines.news.yahoo.co.jp/fuwaraizo/20170109-00066397/）

ジル・A・フレイザー（2003）窒息するオフィス―仕事に脅迫されるアメリカ人　岩波書店

風間直木（2007）雇用融解　東洋経済新報社

桐生純治（2009）学びで自立の道を拓く―喬木村から　月刊社会教育　No.645, 34-37.

川崎村（1999）川崎村グリーン・ツーリズムモデル整備構想　岩手県川崎村

小林美樹（2007）ルポ　正社員になりたい　影書房

毎日新聞（2017年）高知・大川村　議会廃止し「町村総会」検討　村長が表明へ 6月11日（https://mainichi.jp/articles/20170611/k00/00m/040/091000c）

ながの経済研究所（2017）地方創生下の人口増加町村の取り組み (http://www.neri.or.jp/www/contents/1488185405967/index.html)

中西新太郎（2004）若者たちに何が起こっているのか　花伝社

中武倫子（2016）「垣根のない世の中へ～小さな村の小さな私が伝えたい“ハシ”の日活動～」宮崎「橋の日」実行委員会　宮崎「橋の日」活動30周年記念イベント「橋」を通じた地域づくりシンポジウム～協力・共感・共有でつくるまちづくり8月19日（宮崎市民プラザ　オルブライトホール） (http://www.hashinohi.jp/30th/sympo.html)

内閣府（2003）国民生活白書　独立行政法人　国立印刷局

内閣府（2004）国民生活白書　独立行政法人　国立印刷局

NHK NEWS WEB（2016）生活支援相談7割は働き盛り　埼玉県のニュース　埼玉放送局　6月20日 (http://www3.nhk.or.jp/lnews/saitama/1106966571.html?t)

日本農業新聞（2017）若手就農　高水準続く　16年49歳以下2万2050人「田園回帰」着々と法人雇用が後押し　9月10日（https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170910-00010001-agrinews-soci）

日本青年団協議会（1998）子どもたちの居場所を地域につくる　日本青年団協議会

日本青年団協議会（2001）地域青年運動50年史―つながりの再生と創造　日本青年団協議会

日本青年団協議会（2006）第51回全国青年問題研究集会レポート集　日本青年団協議会

日本青年団協議会（2015）第64回全国青年大会報告書　pp.75-76.

日本青年団協議会（2016）第61回全国青年問題研究集会レポート集　日本青年団協議会

日本青年団協議会青年団研究所（1956）日本の青年　読売新聞社

西米良村（2001）第４次西米良村長期総合計画　西米良村
西米良村（2009）かりこぼん―にしめらの香り里あんない　西米良村
西米良村（2009）ようこそ！西米良村へ
（http://www.nishimera.jp/modules/contents01/index.php/02/index.html）
西米良村観光協会（2009）カリコボーズの春めぐり　西米良村観光協会
西米良村議会（2017）にしめら議会だより　No.145
（https://www.vill.nishimera.lg.jp/village/wp-content/uploads/2017/08/gikaidayori_H2905_No-0145_optimized.pdf）
西米良村青年会（2016）第22回「新春やまびこロードレース大会」実施要項
（http://www.discover-miyazaki.jp/event/item_8957.html）
西米良村役場農林振興課（2017）西米良村ゆず団地への新規入植者を募集
（https://www.vill.nishimera.lg.jp/village/b-00-businessperson/10001947）
乗りものニュース(2017)新幹線通勤、補助する自治体が増えているワケ　移住や定住促進　その先は…？
９月25（月）（https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170925-00010000-norimono-bus_all）
沖縄全島エイサーまつり実行委員会（2017）エイサーの起源（http://www.zentoeisa.com/）
パク・ジョアン・クチャ（2007）会社人間をつぶす　朝日新聞社
総務省自治行政局過疎対策室（2009）「新たな過疎対策について」
（http://（www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2001/kaso/kasomain0.htm）
橘木俊詔（2004）脱フリーター社会　東洋経済新報社
辻　英之（2009）へき地山村の教育力―泰阜村から　月刊社会教育　No.645, 26-29.
前田　豪（2004）西米良村の挑戦―ワーキング堀ディービレッジ　鉱脈社
宮本常一（1963）村の若者たち　家の光協会　（2004年　復刻版）
労働調査会出版局編（2008）こうして手にする仕事と生活の調和　全国労働基準関係団体連合会
琉球新報（2015）日本青年団協会長に照屋仁士さん　県内から初　３月23日
（https://ryukyushimpo.jp/news/prentry-240743.html）
西都市（2017）市の歴史・天然記念物・民俗文化財（３月31日現在）
（http://www.saito-city.jp/shiseigyosei/0501_1703310000000003.html）
西都市 東米良地域づくり協議会（2017）東米良地域づくり協議会の概要　３月25日
（http://www.saito-city.jp/kurashi/0117_1703310000000005.html）
総務省統計局（2016）男女別人口推計（平成17年～28年）
（http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2016np/index.htm）
たぶちほのか（2001）祖先を弔う“アンガマ”　日本トランスオーシャン航空（株）
（http://www.churashima.net/shima/ishigaki/angama/）
東京新聞（2015）非正規社員が初の４割　高齢者再雇用、パート増加　11月５日朝刊
（http://www.tokyo-np.co.jp/article/politics/list/201511/CK2015110502000154.html）
館浦あざらし（2017）来夏の豊穣を祈る　石垣島白保の豊年祭　CORALWAY　7, 8月号　No,171　日本トランスオーシャン機内誌　p.29-35.
馬路村（2017）馬路村の概要（http://www.umajimura.jp/publics/index/26/）
若人の集い（2008）30周年記念誌
若人の集い（1998）もっとおもしろい読本―八雲町どんな町　若人の集い
八雲町（2005）やくも（八雲町観光パンフレット）八雲町
「なもないミニコミ誌」編集室（2005）八雲の宝もの「なもないミニコミ誌」編集室
八雲町（2009）八雲町INFORMATION（http://www.town.yakumo.lg.jp/summary/default.htm）
八雲町（2017）八雲町のあらまし

(http://www.town.yakumo.lg.jp/modules/yakumois/content0002.html)
八雲町　若人の集い（2017）2016年主催事業
(http://www.town.yakumo.lg.jp/modules/syakyo/content0005.html)

（注）

1　一連の研究は、以下の通りである。初期の研究は、2005年度～2006年度の市民との共同研究（埼玉大学公募プロジェクト：代表・坂西友秀）「子どもの地域生活と人間関係」、2008年度～2009年度の科学研究費「過疎農村の地域発展と少子化対策の日韓比較研究―外国人定住政策を中心に」（代表者：千葉悦子）、であった。また、2007年度、2008年度（代表･日本青年館･日本青年団協議会「青年活動コーディネーター養成事業」）、文部科学省補助事業の一環で青年の生活と労働に関する聞き取り調査を行ってきた。2010年度～2012年度「実践的教育方法学としての戦前期教育心理学の領域固有性の確立過程」、2013年度～2015年度科学研究費「戦前期、教科教育における教育心理学の発達科学・教育方法学としての浸透・定着過程」の助成を受け、中国東北部延辺州の「出稼ぎ」問題を中心にした地域事情の調査、及び台湾の地域事情の調査を行った。2015年７月～2016年３月　埼玉大学長期研修制度により、「石垣島の歴史的変遷と地域社会・伝統文化の維持継承に果たす役割に関する研究」を行った。

2　論文の初出一覧

坂西友秀　2005年11月「メルトダウンする若者」『青年』日本青年館　第４巻　pp.20-24.
坂西友秀　2006年12月　「『イベントつながり』から見えてくるもの」The Seinen　日本青年館　青年問題研究所　pp.20-26.
坂西友秀　2008年３月　「やっぱり島が好き」『若者問題』春号　日本青年館（文部省補助事業）pp.13-18.
坂西友秀　2007年12月　「就職したはずなのに―『自立』できない若者たち―」『若者問題』秋号 日本青年館（文部省補助事業）pp.2-8.
坂西友秀　2008年「地域社会・地域の文化と子どもの生活」―「市民との共同研究」報告書―（研究代表　坂西友秀）全100頁（坂西友秀・原田裕子・馬場久志）第１部・第２部
坂西友秀（2010）若者の地域社会への関わりとその存続に果たす役割　心理科学　第34巻第２号　80-110.
坂西友秀（2015）沖縄・石垣島の変遷と青年　埼玉大学紀要教育学部　64(2), 85-119.
坂西友秀（2015）「教育の心理學」に関する研究と二つの世界大戦（Ⅱ）―戦時における臺灣・中國・フランスと日本の関わりを例に―埼玉大学紀要　教育学部, 64(1)：23-45
坂西友秀（2017）青年を通して見た地域社会の現状「日本の文化と思想」生活ジャーナル
張　麗花・坂西友秀（2018a）海外に見る「過疎化」がもたらす影響（Ⅰ）中国延辺朝鮮族自治州延吉市：「留守児童」の事例研究　埼玉大学紀要教育学部（教育科学）Vol.67, no.1, pp.61-89.
張　麗花・坂西友秀（2018b）海外に見る「過疎化」がもたらす影響（Ⅱ）延吉市における「出稼ぎ」の実態と「留守児童」への影響　埼玉大学紀要教育学部（教育科学）Vol.67, No1, pp.91-99.

（2019年３月27日提出）
（2019年４月19日受理）

Community Depopulation and the Role of Youths（Ⅰ）・（Ⅱ）

BANZAI Tomohide
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper has clarified the current situation of depopulated local communities through interviews and case studies. This paper also used the individual case studies as an analysis material to illustrate the regional change and the painful situation today. In order to maintain the local community, it was demonstrated based on the cases that the creative power of young people and the autonomous group (Seinen Dan) activities rooted in the area are essential. Furthermore, the youth deepens their own inner world through their autonomous collective activities and interaction with residents in the community. In the discussion, they suggested that by acting in the local area, they formed their own social identity and grew mentally.

Key Words: regional area, youth,depopulation, local culture, “Seinen Dan”